

古今襍考  
一

□ 7  
3222  
1





古今秋結考序  
 師入場乃大謝代  
 渡志家來故相留  
 飲直人王伎師乃  
 成志也附如外傷  
 成與專武人毛來  
 相會真誠列秋  
 乃為命七人乃在





門口 7  
號 3222  
卷 1

古今妖魅考序

師木嶋乃大御代尔。中子止云布物乎。  
渡志參来尔。祁留乎。其甚異加留行尔。  
氏直久正伎。神乃御國乃風儀尔。波似  
氏志毛附加努。妖偽事尔。奈母有祁礼  
波。愛尊武人毛。受依留人毛。其枉言尔  
相口會氏。狡久狂礼惑波。奴波無志天。  
世乃為尔。毛人乃為尔。毛。甚惡加流事。

八海  
33  
1

○古今妖魅考序

一



奈毛轉有苗乎。天地止。日月止共尔。窮  
美無伎。大御代乃内尔波。唯暫時乃事  
尔許曾有礼。人乃世波。百繼八十繼止  
經行氏。遙祁久遠伎事尔。奈母有祁礼  
波。慨美歎加努波。無久奈母有祁礼。杼  
其將功驗。奈伎物思尔天。何乃代尔加。  
此禍事乎。却以給波武。何乃時尔加。此  
惡風乎。直志給波武止。神乃所為乃。甚

願波志久氏。奈毛有祁流乎。吾師大人  
伊。神乃御手代止。却以退久止。雄偉志  
久健備氏。和乃漢乃。佛乃書尔有苗實  
徵乎得。歷世尔有都留事跡乎。探索米  
氏。伊那醜目污穢伎。佛祖與利始氏。相  
交許礼。苗僧徒麻傳。現世乃間許曾。人  
乃狀波變布麻。自祁礼。魂乃行方波。五  
月蠅奈須。妖魅止成乍毛。冥府尔罰米



良延氏有留事乎。熟尔見焜志。論定氏。世尔幸倍牟止。著速波佐礼祁苗奈毛。此書奈利祁留。如此有尊伎羨志書乎。徒尔文庫乃内尔。隱米置倍志夜波止。氏。鐵胤主尔相謀利。印本止為志氏。萬代尔後世尔。傳倍弘牟留尔奈毛。時波天保二年止云牟乃春。如此云波。越後國蒲原郡新津郷人。桂譽正。

○此書の成る由ありし

よまこれ古今妖魅考といふ書はも。林羅山先生の説トキトに依りて。我父に。世り化物バケモノと云ふものあり。其本縁ソノモトイシを考覈カウカクめられし書あり。いで其大意をたゞ小述コトてむ。化物とは即麻我毛能マガモノの石根木株イハネキネ草カキハ片葉アラミナワ。青水沫ヨリツも憑託ヨリツきて。言語モノイハしめ。謂イハある非情の物字も。起タち活動ハタラう志む。麻類マヒ字ジいふを本ホとありて。人の靈魂タマ此人コノヒトを扱サツきて。異祀イニ所行シヨウをれし。或を狐狸キツネの類ルイに在アる態タマシを毛モみれ。まへてさう言ふあり。妖魅の二字は。其レ不當マカまる漢字カラモジれる哉。音コトも讀ヨミべき。為ムネよ專ムネとハ此コノ字用シらる。古コくよ。枉物マカモノ悪鬼アクキ。妖怪ヤクイなぞ。猶ナくさくよ書來キキ。扱サツきは強シビて拘カを係事ケイジなく。孰イシをも書れり。ばて麻我神マガミま。麻我毛能マガモノと。何ナニある義コトぞと云ふ。世の治シれる時を乱ミさむとし。人ヒトに福フクを見てハ禍マガミせれし。万マン直チキれるを惡キヲひて。枉マカを好キむ故ユ。禍神マガミとも枉物マカモノと云ふ。毛能モノとは。鬼神カミガ人種ヒトノカミ。万物マンブツ。何ナニも廣ヒロくいふ称ナリあり。抑サメまのま賀カもの。出來キし始ハジメを稽カミガゆるす。



久方此天劫神世小。伊那那岐。伊那那美二柱大神。男女此御事を始み。御子生  
みひらる。小女神伊那那美大神。はちみふ事ありて。夜見国に往坐る哉。男神伊  
那那岐大神。その御後を追ひて。其国小到りみへ。然る小此夜見国をも根  
国下於国と云ひて。醜めき穢き国れるが上。伊那那美大神。まで小其戸喰  
ちみひて。歸てみふ事と能ハ。甚も忌々き御有状を。見畏み逃歸り  
みひて。後小其穢悪を祓ひみちむとて。日向の橘は小戸ちみ水戸に到坐して。  
禊祓ひみふと。其大御身小著る物等を脱棄みひし。長道般神。煩神。閑齧神。  
奥疎神。邊疎神。などいふ神れ。是る世小も人小も。悪事。及び神の始あり  
り。斯て千万歳を過來し程。其悪神とを多く成ぬるが上。中御世小蕃国  
よ。佛ちみ物を献れる時。副來つる妖魅も多かりしと聞ゆる小。此方より其  
道に率れる者は。やがて其鬼と成り。漸くみふえ行て。世小は。く志き事れも  
多く成り。然る小此妖魅ちみ物。現人の目小見えぬ。幽冥此物小し有せば。

其情状を察する事。いと難き態ある故。よく考明せる。もの有らざれば。世の庸  
人の辨へ知ら交て。思ひ惑ふも。尤も依事小こそ。然しも枉もけ。漫まるより。  
古に神の御事は。鹿略小あり行。神等は坐まさぬこと。隠るひまし。高麗卑  
れ悉。彼佛と。小蕃神をし。上なく貴物とめて。敬ひ。世人の心。拙く女。さくぞ  
成れ。り依。是は枉物。相率り。相口會て。最も悲く。慨き事。極み  
ありけ。然る小時や來小む。天文を稱し。御世。東照神祖。命生れ出み。天正  
慶長。あど云し。御世頃。小專と。天皇。御為。天下を鎮め。み御業。小勞。せ  
み。服。ぬ人。を。は。御仁惠。を。以て。事。向。め。み。暴。ぶ。者。等。を。ハ。武。武。御威  
稜。を。振。ひて。征。伐。め。み。將。ある。皇。典。等。を。召。問。して。次。小。古。の。御。式。小。復。し。  
廢。れ。る。神。事。を。も。興。し。み。ひて。天。の。下。よ。く。治。り。目。出。た。御。代。と。は。成。り。り。  
さ。依。大。き。御。舉。致。し。輔。佐。申。され。る。臣。小。ち。は。最。多。か。る。中。小。林。羅。山。先。生。ハ。も。  
文。道。の。事。小。仕。奉。ら。る。程。小。神。社。考。ち。小。書。を。著。して。神。社。の。縁。起。を。述。べ。彼。佛。



法の異端ある由を論ひ。其中にも天狗ちふ妖魁の本因を考明されあるハ。  
古今の比形く傑する説小亦も有る。殊小此ふみ早くあり板本と成て世  
小弘まはる。高知も卑きも悉く此説子信奉るべくありける。最も愛  
む事なり。然る小此書はしも王公大人に聞えむとて其文躰に記さむ  
されむ。庶人の心訥きは悟得てや有む。かく學の道に開けつる御代小しむ  
彼左道説小誑され或も君上の命令小戻り。何るは家の産業を棄て。冬もく  
先祖の大本とする。神祇をし。鹿略されし奉承者。世に多く有める。甚く歎  
うはしく傍いふ事。愛小我父はも早くまはる。此先生の此説をし。深く  
信ひみへる。餘り。いづで此を。天下の大凡人に容易く読得べく書成し。は  
去の徴とる。成べき事等。手近き軍物語を始め。數に書等より抄出して參  
考へ。詳く解悟してむと。年毎糸く心雷置れ。甚多小成ぬるを。此文政の  
五年と云る。年小。其を大抵小記し序。自れ考按をも添られ。成小。三百葉許

と成り成れば。書名をもかく負せて。側子さし置れ。親き教子。一速く  
乞申て見めて。同輩の兄弟。知らせて。彼刊本。著述書目。載  
つ。成り。弟子等ハ更にも云ふ。此方彼方。人々あり。いづで。と急ぐ。成。其  
答へ。倦む。迫り。愛小已申り。成。かく人々。此乞申。敏く清書。て  
見せ申。さはやと願申せ。猶も考正して。後小。父の許し。みされ。さて過  
ちるを。今年ま。強てこひ申て。かく淨字。て。我黨の人。小見。事とは成  
正ぬ。かくて此論説の次第を云む。先始。天狗とふ名義を辨へ。其物の形  
状を。和漢の書。證し考へ。日本紀の訓。依て。天狗。ち。物。事。も及び。夫より。彼  
佛祖。釈迦法師。立。戒。許。多。其。違。む。者。は。盡。小。魔。道。子。隨。つ  
とふ。其道。法。あるを。世。の。僧。等。の。そ。成。脱。れ。は。一。人。も。有。ま。は。由。を。説。明  
され。將。その。物。と。も。三。熱。れ。苦。と。云。事。何。る。因。縁。を。け。へ。天。堂。地。獄。の。躰。相。種。く。此  
苦。患。何。る。事。を。も。辨。へ。閻。魔。地。藏。と。い。ふ。鬼。の。由。來。序。小。三。途。河。れ。老。婆。の。事。も



ねのひ。夫よ。西方極樂浄土の。往生といふ事までを解呈して。然る事どもは  
悉く。佛祖の幻説なりしより。出来たる事なる由。博く諸經論を引て考注  
され。終に小源平盛衰記あり。開発源大夫住吉と名告ゆる者の語。あ。太平記  
あり。雲景が未來記と云物の説ちとを摘出。貢高邪慢は所為なる者。悉く  
魔縁にて。果をみ。天狗道に落べき事。我古學の輩といへども。其心を極ハ  
皆同じ。悪道に落べき由縁までを。委く辨へ論ハま。斯て。此神社考ハ。先生  
の趣意。此如く。王公大人は。敏く聞召し。なふ。今申出る。及む。此の書  
は。庶人のよく読み。執く味ひて。佛道の異端ある由を辨へ。地獄極樂など云は。  
皆。此。積魔。此。変現して見ゆる。態。此。事。心得て。少も惑ふ事なく。魂。此。柱  
を。太く固く。衝立て。我本來の正道を守ら。め。む。が。為。かく著述られ。見む。人。此  
意。得て。よ。かく云時。文政。此。十一年。といふ。年。此。四月。平。此。田。鐵。胤

古今妖魅考一之卷

平篤胤輯考

門人

- 備中國 堀家政富
- 武藏國 藤田勝誠
- 遠江國 中村真幸

同校

○敘言

林羅山先生此神社考小。我邦自古稱天狗者多矣。皆靈鬼也。  
較著者。是非星之義也。或爲佛菩薩相。或爲鬼神貌。時時出現。  
或爲狐。或爲鳩。飛行。或爲童。或爲僧。爲山。伏出。于人間。其說曰。  
見人福。則轉爲禍。遇世治。則復爲亂。或發火災。或起鬪諍。沙門  
史有慢心。及怨怒者。多入天狗之中。所謂傳教弘法。慈覺智證



等是也と記し。

但し此を大意を引約えて舉ぐれむ。委しくは本書小就て見るべし。

此餘おも古く名僧大徳に聞有し僧等此名を多く舉られぬ。庸人は甚く驚く事あると。

但し神社考を非爲庸人而言也。是は既す序おも本文も記されし。僧等甚く右の説を惡みて。神佛冥應論。神

社考私評論。同辨疑ある云ふ書等。成著して。辨了れど。少りも破し得し。依説れし。

博聞絶倫ある。先生れ語し有れむ。決めて確證有て言

し説と己は深く信ずる心。身自も正し。又證を見得てお

そや。年おろ讀む書どもれ。其證と成るき事實。成ら。爪印して鈔録せる。甚多く成し。其を記し。整。少考按を

も書加ふれむ。所思。かく名負て。得有ましく成し。故ま於始を。天狗といふ名義の事。論ひ起し。於。

羅山先生れ語。我邦にて天狗と稱す。依て。靈鬼比較著者。みて。星の義。非。と云れ。星小天狗と云ふ。有れ。世。天狗といふ。其星の義。非。と云。然。予。按。其物は。異。天狗を稱ふ名は。かの天狗

星といふ化物の名を取れる。其を。其を。所謂天狗



星此事は諸越の史記漢書晉書あど云ふ史等も天狗狀如大  
奔星有聲其下止地類狗所墜望之如火光炎々衝天まも西北  
有三大星如日狀名曰天狗天狗出則人相食はと天狗如大流  
星色黃有聲其止地類狗所墜望之如火光炎々衝天其上銳其  
下圓如數頃田見則流血千里破軍殺將まも流星有光見人面  
墜有聲若有足者名曰天狗其色白其中黃黃如遺火狀主候兵  
討賊見則四方相射千里破軍殺將人相食所往之郷有流血其  
君失地兵大起國易政あど見えあど。

上件の文どもは目易く引約めて擧ぐられむ少く本書と異  
小見ゆる處え有はし。

此を合せて思ふよ此化物も大凡の狀狗小類て頭銳口喙  
あり人面小も見成あぐ。天よと墜る故。天狗と名負く依  
也り。斯て此物犬の如く横行し。あ人此如く豎行もはる  
物と見えし。

そは後の物あぐ。今此清代小成する。述異記をいふ書も。  
康熙壬子四月廿二日黎明錢唐西北郷有孫姓者門未啓鄰  
人夙起見孫屋脊上有一物似狗而人立頭銳喙上半身赤色。  
腰以下青如靛尾如篲長數尺驚呼孫告之甫開門其物騰上  
雲際忽聲發如霹靂委蛇屈曲向西南而去也。上火光迸烈如  
篲之掃天移時乃息數十里内皆聞其聲亦有仰見其光者所



謂、天狗墜地如雷也。甲寅有逆藩之乱と見えたり。此を已い  
まふ其本書を見ざれど。村瀨之熙が執苑日涉といふ書に  
引くるを再擧ぐる形也。亦漢籍に此化物の餘は龍をも  
鳥をもはく石をけり。天狗といひし事あり。其を此に  
要れき事あり得辨へず。此餘は仙を天狗といふ事あり  
也。其を下小辨ふべし。

儲の化物也。漢人を星に墜て化する物也。思へる趣にて上  
小擧ぐる史等小然云する耳あらば。昭明下爲天狗所下兵起  
血流。昭明星也とも。或を太白星散爲天狗とも云すれども。眞  
の星に墜下るはき由無れど。

漢人はやもにまむ。星に下ると云説を云ども。眞の星を墜  
下れど。亦化物に非ず。此をよく天文の事考學びて知べし。  
此を異ふる妖物の態と形を星の如く見らるる。博聞録に。  
陰山有獸焉。其形如狸而白首。噉蛇名之天狗と云ひ。

上小擧ぐる書等には。狗小類ると云する小。此録よを狸と  
如ると云す。亦違へる似るも。共う大凡の状を云へ  
る形れど。亦狐に似るとも。鳶に似るとも云ひ。於べし。拘  
を亦可うらば。

山海經にも此説を記して。其光飛天流而爲星。長數十丈。其疾  
如風。其聲如雷。其光如電と有れど。此妖獸の態と見えたり。



然るを上より引くる史等フミドモ也。此を星といふ所依也。流星の如く  
光りて飛ぶ故に星と思ひ過りて種々雷同しける説ども  
を云へるに於て決めて星の化ふる非也。彼妖獸の化て星  
の如く見ゆる也。藤井高尚説。山海經云。天門山有赤  
犬名曰天狗。其光飛天流而為星。其聲如雷と見え。五雜俎云。  
俗云天狗所止。輒夜食人家小兒。故婦女嬰兒多忌之とあり。  
此を山に住む怪き物の出で空をとび行き大なる流星の  
形を見ゆまじと。眞此星ならぬ故に高く聲を立て止まる處  
小ては人家の兒をとて食ふとけるは樹神山鬼の類あり。  
和名抄云。樹神山鬼。或こまや云也。此木靈也類を天狗と

も云へるのみ。同じ様ある物れまじ。物語ふみ小は天狗の  
ふまや並ても云也と。其天狗説よりいひしは然る説あり。  
乃て皇國にて此物の現れとあり。舒明天皇紀云。九年二月戊  
寅。大星從東流西。便有音似雷。時人曰。流星之音。亦曰地雷。於是  
僧旻曰。非流星是天狗也。其吠聲似雷耳と有る。まき始りて此  
年果して東夷に乱起りしは。上毛野君形名といふ人を將  
軍と志して討しめ給へる小夷の軍強くて御軍敗れりし。形  
名君の妻いよく慨みて女軍を起し。夷に軍を大に敗りて悉  
く虜小為とせり。

戊寅は二十三日あり。僧旻は元也。我法師にて有しうば。



早く史記漢書にこれ説を知り居て。此時かく天狗ありとは。断れるあらむ。

信<sup>ヨト</sup>和漢とも小。此物の出<sup>ヲ</sup>る時を。かく兵乱ある事を。甚も妖<sup>ガク</sup>くし此物形なり。

神世<sup>キヨ</sup>聞えし香<sup>カ</sup>く背男<sup>セヲ</sup>といふ星神を。既<sup>ハヤ</sup>く健葉槌<sup>ケンハツチ</sup>神<sup>ツチ</sup>を誅<sup>ツチ</sup>はせしゆが。此を若くは。其流<sup>ス</sup>裔<sup>エ</sup>の物小非ざゆ。香<sup>カ</sup>く背男を決<sup>キ</sup>免て。大白金星小住<sup>ス</sup>る神あるべき由は。古史傳<sup>コシデン</sup>云<sup>ク</sup>る如くある小。漢籍<sup>カンキョク</sup>に大白星散<sup>シロホシチリ</sup>為<sup>ル</sup>天狗<sup>テンコ</sup>とあるを。由有<sup>ユ</sup>なり。但<sup>タ</sup>し此を庸人の爲<sup>ニ</sup>小いふ言<sup>ハ</sup>なり。

らて御紀<sup>ミコキ</sup>に依<sup>ル</sup>天狗<sup>テンコ</sup>字<sup>ジ</sup>に傍<sup>ナリ</sup>。阿麻<sup>アマ</sup>都<sup>ツ</sup>伎<sup>キ</sup>都<sup>ツ</sup>祢<sup>ネ</sup>と付<sup>ク</sup>るは。私記

も同訓<sup>ドウクン</sup>を依<sup>ル</sup>。古<sup>コ</sup>に博士<sup>ハカセ</sup>の深<sup>コ</sup>く思<sup>ヒ</sup>て付<sup>ク</sup>る訓<sup>クニ</sup>ありて。此を皇國<sup>クニ</sup>にて天狗<sup>テンコ</sup>といひ習<sup>ナラ</sup>へる物<sup>モノ</sup>に。妖<sup>ガク</sup>くし此<sup>コノ</sup>状<sup>カタ</sup>の。天狐<sup>テンコ</sup>といふ物の趣<sup>オモ</sup>に類<sup>ニ</sup>ある故<sup>ユ</sup>に依<sup>ル</sup>。

埃囊抄<sup>カクシヤウ</sup>天狗<sup>テンコ</sup>名目事<sup>ナメジ</sup>といふ條<sup>ジョウ</sup>に。天狗<sup>テンコ</sup>也<sup>ナリ</sup>も天狐<sup>テンコ</sup>と毛書<sup>モカキ</sup>て通<sup>ト</sup>はし用<sup>ヨ</sup>ふ。然<sup>シカ</sup>まは日本紀<sup>ニッポンキ</sup>に天狗<sup>テンコ</sup>と書<sup>キテ</sup>。ア<sup>ア</sup>ツグツネと訓<sup>クニ</sup>め。字<sup>ジ</sup>を狗<sup>コ</sup>と訓<sup>クニ</sup>はクツネあり。是<sup>コト</sup>通<sup>ト</sup>へる事を顯<sup>アハ</sup>せられ。と云<sup>ク</sup>へまは。當時<sup>トウジ</sup>クツネ也<sup>ナリ</sup>訓<sup>クニ</sup>し本<sup>ホン</sup>も有<sup>リ</sup>しと聞<sup>ク</sup>えり。舊<sup>コウ</sup>く狐<sup>コ</sup>を久<sup>ク</sup>都<sup>ツ</sup>祢<sup>ネ</sup>とも云<sup>ク</sup>なり。

然<sup>シカ</sup>るは天狐<sup>テンコ</sup>といふ物の所<sup>トコロ</sup>爲<sup>ル</sup>。廣異記<sup>コウイキ</sup>といふ漢籍<sup>カンキョク</sup>に。唐<sup>タウ</sup>汧<sup>キ</sup>陽<sup>ヤウ</sup>令<sup>メイ</sup>某<sup>コト</sup>在<sup>ニ</sup>官<sup>クニ</sup>忽<sup>ト</sup>云<sup>ク</sup>。欲<sup>ス</sup>出家<sup>セツト</sup>。念<sup>ネン</sup>誦<sup>ソ</sup>懇<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>月<sup>ツキ</sup>餘<sup>リ</sup>。有<sup>リ</sup>五色<sup>ニ</sup>雲<sup>クモ</sup>生<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>舍<sup>ニ</sup>。又<sup>マタ</sup>見<sup>ル</sup>菩



薩坐獅子上。呼令歎嗟曰。發心弘大當得上果。宜堅固自保。無為退敗耳。因爾飛去。令因禪坐。閉門不食。六七日。家人憂恐。損壽會道士公遠。自蜀之京。途令子請問其故。公遠笑曰。此是天狐耳。因與書數符。當愈。令子投符井中。遂開門。見父餓憊。逼令吞符。忽爾明悟。不復論修道事。

上件の事ども。今昔物語集。宇治拾遺物語。あど小美濃國伊吹山。此聖人が許へ。佛菩薩來迎の相を現じて來れる。天狗の所為よいと能合あり。其を第三卷小引とる文を見て知べし。まゝ羅公遠が事。續谷響集五卷にも見えあり。

後數歲罷官。過家家素郊居。令暇日倚杖出門。遙見桑林下有貴

人自南方來。前後十餘騎。狀如王者。令入門避之。騎尋至門。通曰。劉成謁令。令甚驚愕。既見升堂。坐謂令曰。蒙賜婚姻。敢不拜命。令有室女年十六歲矣。令曰未相識。何嘗有婚姻。成曰不許婚事亦易耳。以右手掣口而立。令宅須臾震動。井廁交流。百物飄蕩。令不得已許之。婚期尅翌日。成親後恒在宅。資以饒益也。他日令子詣京見公遠。公遠曰。此狐舊日無能。今已善符錄。吾所不能及。令子懇請。公遠奏請。行尋至所居。于令宅外餘步設壇。劉成策杖至壇。所罵曰。汝何為往來靡所忌憚。公遠法成。求與交戰。成坐令門。公遠坐壇。乃以物擊成。成仆于地。久之方起。亦以物擊公遠。公遠亦仆。如成焉。如是往返數十。公遠忽謂弟子曰。彼擊余。殪爾。宜大臨。



吾當以神法縛之。及其擊也。公遠仆地。弟子大哭。成喜不為之備。公遠使神往擊之。成大戰。恐自言力竭。變成老狐。

玄光法師が擬山海經も此説を擧て。其首書小善符録而  
非其人則去劉成間不容髮矣。世俗奉而為神聖者。吁可悲と  
云予るは卓見あり。抑漢土の道士といふ者能態オホムネ大旨皇  
國の會易家能態小等ホトしき物あり。其使ひとる神と云も。安  
倍晴明が使へる。式神といふ物の類タビうぞ有べき。此を事の  
因チミ小云ふのみなり。

公遠既起以坐具撲狐。裹之以大袋。乘驛還都。玄宗視之。以為歡  
笑。公遠白曰。此是天狐。不可得殺。宜流之東裔耳。書符流于新羅。  
狐持符飛去。今新羅有劉成神。土人敬事之。とあり。

廣異記の本文。これより要とれき文を引約めて擧ぐり。因  
みいふ元亨釈書小。新羅明神者。天安二年。圓珍師泛舶。自唐  
歸。洋中忽有老翁。現船舷曰。我是新羅國之神也。誓護持師。教  
法。至慈氏下生語。已不見珍。入京將傳來教籍。藏尚書省。時海  
上翁來曰。此所不堪。置經書。是日域中有一勝地。我已先相攸。  
師聞。官建院宇。度此典籍。又佛法是王法之治具也。佛法若衰。  
王法亦衰。語已形隱。珍歸。睿山至山王院。時山王明神現形。曰。  
傳來經書。宜藏此所。新羅明神又出曰。此地來世必有喧爭。不  
可置也。南行數里。是為勝處。珍乃與新羅山王二神。到滋賀郡。



圍城寺。新羅明神語珍曰。我ト居寺之北野。時百千眷屬倏來  
圍繞。唯珍獨見。他人不知。自此新羅明神。威靈益顯とあり。此  
事。釈書にみあらば。多くの古書に見ざるが。新羅國に神と  
名告るるも。圓珍に説く。妄説の趣とを思ふ。決めて彼  
の劉成神あらむと覺也。然依を俗に學者とちの説。新羅  
明神を。素盞鳥尊の化現とやと云へるも有るは。餘り小事  
を辨へざる言なり。慈氏とは弥勒といふ佛に事れるが。其  
下生とは。釋迦佛在世の時。小記を受てよ。五十六億七千  
万歳の後。小世よ出て。正覺を成べと云ふ。釈家の幻説ある  
を。素盞鳥尊にいうで。其を信じて。佛法を守り給む。佛法

是王法之治具也。云々あど云るも。殊に天狐の誑惑説あり。  
然まは天狗小。阿麻都伎都祢也。訓を付ふるは。皇國にて天狗  
と云ひ習へる物の所為此。かの天狐といふ物に所為は類  
る故。然よみこる事疑れく思也。

然らでは字の俛小。アマツイヌ也。訓。倭。アマツイツネ  
と訓るを。然る事。或思をばハ。得よむまじ。此訓ある故や。  
ま。仙家此説を攷ふる。ま。抱朴子對俗篇小。彭祖言。古之  
得僊者。或身生羽翼。變化飛行。失入之本。更受異形。有似雀之爲  
蛤。雉之爲蜃。非人道也。ま。至理篇小。或有邪魅山精。侵犯人家。  
以瓦石擲人。以火燒人。屋舍。或形見往來。或但聞其聲音。言語と



見え。まゝ登涉篇小。萬物之老者。其精悉能假託人形。以眩惑人目。而常試人。唯不能於鏡中易其真形耳。是以古之入山道士。皆以明鏡徑九寸已上。懸於背後。則老魅不敢近人。といひ。但し彭祖がいたる神仙の事迹を。粗皇神の道も等しく。彼天狐老魅などいへ流類とは。甚く異形れ也。其形状の稍似あるは。小姑く徴し記せるあり。

はと山人此説を傳聞する。小魑魅といひ。天狗とせしむ物。の本は鷲鴛狐を更小も云。餘の鳥獸も。數百千歳を經ては。鳥を兩翼より手成生じ。本よ此兩足小肉を生じて立ち。獸は前足小翼を生じ。異形あら。稍人に似たる形と化て豎行

し。共小飛行するが中小翼れくて飛行するも有りと聞。其中にも雷獸を狸に似て空中を翔る物あれ也。上小引る山海經。博聞録などの説小符ひてきあち。星の如く光を見ゆる天狗也。此物此年經するが。化ふる流あらむも知べから。其飛ぶ時。雷の如き聲を發せといふも。由有て通え。杜甫が天狗賦。夫何天狗兮。氣獨神秀。色似狡狴。小如猿狖。忽不樂。雖万夫不敢前兮。非胡人焉。能知其去就。と云へるも。猛獸と通え。此を仙境異聞とて。別小聞書せる物數卷有り。其を見て知るべし。



此小就て思ふ。古の博士ハカセも。若くは天狗も。狐も化カる物ぞ  
といふ説の舊フルく有しを加ねくも聞知りて。彼訓カノヨミを付しめ  
らむも知ルはうらば。

谷川士清の言小。源氏も。てむぐまふまと云イハす。魃魅カサミは  
類タガひて。或を老鷲の化カる物といひ。日本紀の訓ヨミ小よめて。  
天狐とも物モノは書カた。天狐小。天狐地狐人狐ヒトノ此別有て。今いふ  
天狗アツキノを。元よリて天狐也と云へ。四八目類函小。狐千歳與  
天通ス爲ル天狐トと見ゆれむ。然も有ルはし。獸カモノひてはまみ狸タヌキとい  
ふ物を。天狗テノウを云へり。士清シキヨが言イハす。老鷲の化カる。狐と  
云ふ説。まタ天狗を元よリて。天狐ありと云へる説也。何人の

説あらむ。古人の説と聞ゆるが。仙家の説カ符カひて通キ也。由  
て士清が謂イハゆる。地狐人狐ヒトノを云ふ物此事を知らぬと。天狗  
地狗チノウを並べて云イハす。愚管抄七卷。後鳥羽天皇の。武  
家を悪キヲひ給ふ事を。諫イサめ奉ると。記カキイデ出イらむと思オホゆる處小。  
攝籙と武士をイハす。一ツ小れして。文武兼行して世を守サり。君を  
後見ウシロミ參マらばべき。成ナぬるうや見ゆるあり。是レを一定八幡  
大菩薩の御計ミカひり。天狗地狗のわざうと。濃フカく疑ウタガふべしと  
いひ。天狗とは元來モトヨリいなる。天狗をいひ。地狗とは後小僧ホウソウ  
徒レらガ化カるを云イハす。詳ササあらむ。  
は抱朴子。物之老オシ者多シ知チ。率皆深藏遠處。故人少ニ有リ見ミ之耳。



千歳之鳥万歳之禽。皆人面而鳥身也。と見え。仙家の説也。天狗  
ち小物の本也。鳥獸を依り。數百歳を及て兩翼を生じ。飛行を  
と云ふを。上り引く。漢籍等小云へる。天狗小翼有り。と聞え  
ざ依る。中小は翼なく。飛行を依るも有。と云ふ物ある也。  
但し天狗とこそ云は。正し世といふ天狗の状。あて翼あ  
る物。漢土にも在る也。抱朴子の説。て炳く。ま。下小舉  
る。依尚書故實といぬ書小。記せる事を見て知べし。  
儲ま。世り天狗也云ふ也。上り論へ依種々の物。此化れるは  
更。あ。羅山先生の説。此如く。多くは僧山伏。あどの化。ま。依鬼  
を云ふ。何故。其を天狗と。い。初。むと考ふる。高鼻長喙

小。頭。加の天狗。小。あ。似て山に住み。世り災異。あ。以こ  
をも。あ。天狗。小。類。これ。あ。後白河。上皇。小。見奉。て。開發  
源大夫と名告白せる物の語。僧等の化。ま。靈鬼の事を語  
て。其形。頭を天狗。めて。左右。羽生。と。有を思ふ。也。  
此。源平盛衰記。見。事。る。世。小。い。天狗。事。也。  
正。や。小。語り。傳。る。第四卷。小。舉。て。少。注。せる。を見よ。  
頭。を。天狗。り。て。云。く。を。言。り。依。り。て。元。よ。天狗。とい。ふ。物。有。て。  
僧徒の化れる靈鬼の。其。似。る。故。り。其。名。を取。て。名。と。せる。  
事は。知。ら。ま。也。

埃囊抄小。諸道。れ。長者。諸宗の行者。慢心。小。依。て。天狗。を。成。す。



るは其名を同りまじと。種類各別あるり也云へるは實然る  
説あり。まゝ同書ふ。八坂の寂仙上人遍融。七天狗繪といふ  
事を書れり也と有之。寂仙上人といふを。何頃の僧れらむ。  
七天狗とは何くぞや。此繪卷今も傳れるみや。見ま欲た物  
あり。俗小事れ成ぐと記事を。八天狗を使ひても成ぐと加  
らむあや云めり。えし斯る物小由ある言ふや。まゝ京此愛  
宕山よ上て見しかむ。宮の後よ八天狗社と云ぐ有りき。  
後小愛宕山大権現。強敵退散法といふ物を見るふ。太郎坊。  
火乱坊。三密坊。光林坊。天南坊。普賢坊。觀喜坊。東金坊あとい  
ふ。天狗の名とも見えり。是等を祭れるみや。

斯れば法師とちれ化まじる鬼を舊く天狗と云ひ來りれど。眞  
の天狗小非也。其身よ翼生じて多きは山に住むを。魑魅の類  
小入るみて。釋魔と云ぬべき物みぞ有りる。

漢籍尚書故實やいふ物。章仇兼瓊鎮蜀日。佛寺設大會。百  
戲在庭。有十歳童兒舞。竿杪忽有物狀如鵬鷲。掠之而去。群衆  
大駭。因而罷樂。後數日其父母見在高塔之上。梯而取之。則神  
彩如癡。久之方語云。見如壁畫。飛天夜叉者。將入塔中。日飼果  
實飲饌之味。亦不知其所自。旬日方精。心如初と有之。此を天  
狗とは無れど。正しく翼有し天狗小て。魑魅の類と見也。第  
二卷小論へる。東大寺の開基。良辨を掠去れる鷲も。此類の



釋魔あり。先達も多く。漢土にも世々の如き。天狗も有るといふ證あり。この尚書故實の説を引く。谷川士清云く。五朝小説に載る。飛天夜叉といふ物。塔より下りて婦人を捉む。形鳥鵝に似ると云ひ。廣西通志に。一人約あり。長二丈。面濶三尺餘り。長さは一倍也。被髮鳥喙。背小二翼あり。と云ふ物。世にもいふ処よく合へると云ふ。はる漢土に治鳥といふ物あり。此もいちゆる天狗に似る物あり。其を本草綱目小。越地。淡山有之。大如鳩。青色。穿樹作窠。大如五六升器。口徑數寸。飾以土。聖赤白相間。狀如射侯。伐木者見此樹。即避之。犯之。則能役虎害人。燒人廬舍。白日見之。鳥形也。夜

聞其鳴鳥聲也。或作人形。長三尺。入澗中取蟹。就人間火炙食。山人謂之越祀之祖とあり。此も一種の妖物にて。正る天狗の類と見えし。寺嶋良安云く。先輩僉云。治鳥乃本朝所謂天狗之類矣。羅山文集云。日光山有天狗。好棲息于長杉。猶是愛宕山大杉。榮術太郎之所居之類也。欵蓋指鬼類而言也。といひ。まゝ北國能登海濱有天狗爪。往々拾取之。大二寸許。末尖微反。色潤白。如小猪牙。而非牙。全爪之類也。疑此北海大蟹之爪也。欵若夫天狗之爪者。可有處々淡山中。何有海邊耶。とも云へり。天狗の爪と稱する物も。何物の爪といふ事いまいふ思ひ得也。



抑釋魔といふ稱を佛籍小有としや無としや今覺えば若無  
らむは余が新設ある名と知し然るはま於天竺にて  
魔と云ひ魔羅と云ふ語意を考めり固有の梵語にて自然  
小して靈異ある物をさして云ふ稱あり然るを惡き物の小  
と聞ゆるは如何といふや佛道は相反して其道の妨げと  
爲す障りを作す物あるは彼道より良らぬ物故に佛者よ  
悪く言貶せるなり其を三藏法數十魔の下に華嚴經疏を引  
て魔梵語具云魔羅華言能奪命謂能奪智慧之命又翻作障能  
於修道之人而作障難故也

按之依りはる大論小魔羅或言惡者多愛欲害出世善根故

也とも有る。而て俗小男根をマウラと云ふも佛道より賤め  
る名も思ふよし然らば此をもマウラといふ語の約  
まれ依りて固より正し其古言あるが男根れみあらば女  
會ふも通る名れり其をマウラは眞心にて彼處を眞情れ  
凝結する處ある故に專と稱ふ名あり。了る小云ふ梵語も  
同義と聞えり。猶委くは古史傳あり。印度藏志に説注せ  
るを見るべき。

一 蘊魔謂色受想行識五蘊爲魔蓋貪著五蘊起惑造業也  
五蘊といふ事故。經論とも小説の様いと云痛く紛くしけ  
ま。語易く言はる。此身の地水火風の四大。および四大の



造せる色を。色蘊と名く。百八煩惱等より身小受依城。受蘊と名く。小大無量の想サモひ和合ワカはるを。想蘊と名く。好醜サウ小因サて。貪欲嗔恚等サウれ心を起サし。善惡諸行サウを作サを行蘊と名く。眼耳鼻舌身意の識サウを以て。無量サウれ分別心起る故。識蘊と名く。是五蘊あり。蘊を積集の義とも。蓋覆サウれ義とも云ひて。色受想行識は。よく眞性を蓋覆サウれ云ふ義をもて。五蘊と號へ。以て此五蘊を。皆空ありと明悟して。貪著せざる故五蘊實相といふ。實相は眞如無妄の理と云ふ。五蘊を皆空と見る。おき眞實の佛道あるを。其小貪著して惑サウを起サし。業を造れむ。五蘊はやがて魔といふ義サウよ。蘊魔と名けざるなり。

二煩惱魔。謂一切煩惱之惑爲魔。蓋貪著五塵起諸煩惱也。

按ぶゆサ五塵とは。色聲香味觸をいふ。まゝ大論小。謂百八煩惱等分別。八萬四千諸煩惱と云ふ。五塵を三藏法數サウ。法界次第を引て。眼所見青黃赤白黑。及男女形貌等色。是名色塵。耳所聞絲竹環珮之聲。及男女歌詠等聲。是名聲塵。鼻所嗅梅檀沈水飲食。及男女身分所有香等。是名香塵。舌所嘗種種飲食肴饍美味等。是名味塵。身所觸男女身分柔輭細滑。及上妙衣服等。是名觸塵。塵即垢染之義。此五塵能染汚眞性故也とあり。此五塵小貪著サウるゆ。諸煩惱起サウる。其を煩惱魔と云ふ也なり。



三業魔。謂一切惡業爲魔。蓋殺盜淫妄諸罪也。四心魔。謂一切我慢之心爲魔。蓋心懷貢高常生憍慢也。五死魔。謂人壽盡命終爲魔。蓋業報已畢。捨離現生之處也。六天魔。謂欲界第六他化自在天爲魔。蓋此天爲欲界主。見人修道以爲失我眷屬。空我宮殿。卽興魔事。惱亂行者也。

按びる小同書四魔の下小。瑜珈論を引きて。天魔若人欲超越三界生死。作障礙發起種種擾亂之事。令不得成就と云る。此自在天といふ物を。世に第六天魔王とも云ふ物あり。此を魔とも言へるは。佛道を惡み嫌ふ由りて負くるれまじ。佛道よるよし然も云々。他よるは然しも憎み云

修き物小非也。然るは此天。佛書とも小云子る趣を考ふ。小子孫を相續して人道を行むる物あり。然る小佛法を其を魔事と立たる道あり。其道違へ依故に魔といふ依ありと。自在天よりは。佛道をこそ魔道と云。修りれ。然るは子孫を斷絶して。人道違へむれ。但し此は庸人の爲り。いふ言は非なりし。

七善根魔。謂著所修一切善法爲魔。蓋修行之人或得一善。卽生取著之心。更不加修也。八三昧魔。謂著所得禪定爲魔。蓋修禪之人得一三昧。久味耽著。不求昇進也。

佛法者小。或を一經子依り。或一偈一呪小より。或は一佛一



并一天一明王を採て外を顧ざる者甚多有り。此文小依ま  
は善根魔の人あり。三昧を梵語なり。譯して正定と言ふ。さ  
て禪家此學匠也。此の如き人甚多し。即三昧魔の人あり。  
九善知識魔。謂慳吝於法爲魔。蓋於一切諸法起執著心。不能開  
導於他也。十菩提法智魔。謂著一切法而爲魔。蓋修行之人於菩  
提之法起智執著堅守不捨也。

諸宗の學匠小。かゝる人甚多し。即善智識魔の人あり。菩提  
を梵語あり。譯して道と言ふ。佛道修行此人を普く觀る  
小。此魔を脱れざる人も多く有はしく思也。

はと翻譯名義集小。大論瑜珈論などを引ききて。四種魔を明し。

今謂煩惱魔。是生死因也。五衆魔。死魔。是生死果也。天魔。是生死  
緣也と云ひ。

五衆魔とは。上小いもの蘊魔あり。れち此餘小。愛魔。婬魔。  
罪魔。行魔。惱魔。あと云ふ目あきと。皆上ある十魔は具れり。  
故り。今更小記し出せむ。

魔字は古譯の經論に。石小从磨字を書しを。梁武帝が時小。  
磨を能く人を悩ませむ。字成鬼を从磨しとて。作れる由言也。  
上件三藏法數名義集とも。此小用あき文を省きて。目易  
く記せり。具りは本書小就て見るべき。

葬喪記。棺前設燎火。以去諸魔。此謂阿良知氣と有り。然れむ



魔を呼コヒし古言も有り也。されど他書アタレラミ小見ざる言コトれまは猶ナホよ  
く考ふべし。ちて魔の本説を。上より引ふる佛書ども此説の如  
あれど。釋子と成りて。其道より入らむるは。其本教の如く。十  
魔のホト繼ナリを餘波ナリなく截捨タチスて。生死を出べき事ある。小。其を人  
る者れ。決キめて成得ナレまじた所ワザ爲サる也。人れ決キえて成ナし得エざる  
こちを成ナす免ナむとい。是ぞやがて魔道を依ヨ故コる。古今の釈子  
悉コトクく生死因ユる煩惱魔を更サなり。生死果コトクる蘊魔死魔をも  
去サ取ア也。此コを去畢ハテまでには魔を脱ヌきべ。況シて其戒の多端ある。菩  
薩戒を姑ヒラくおきて。沙弥の十戒を事アふも非アラ縁トと。  
其ソレより佛書ども小。一殺生戒。常念コト有情コト皆惜コト身命コト。當トキ憐愍コト愍コト慎コト

勿レ傷ル。二偷盜戒。物各有主。雖レ一針一草。亦不當カ攘竊ス。三不淫戒。  
清淨自守。不犯色欲。四妄語戒。言說誠實。不以虛言誑サ他コト。五飲  
酒戒。酒能昏神。乱性增長愚癡。當ニ絶ツ飲ス。六離高廣大牀戒。所坐  
之牀。高不過尺六。廣不過四尺。若過此量。則不可坐。七離花鬘  
等戒。不著花鬘瓔珞。不用香油塗身。八離歌舞等戒。不自歌舞。  
乃不觀聽。不蓄樂器。九離金寶物戒。金銀錢寶。不當蓄積。亦不  
許サ手執ス。十離非食時戒。佛制午時為食時。若過午。則不當食。と  
有れむ。形カタを容易ヨクに持タしむべき事コトを非アラ也。  
比丘小至トては。具足戒トとて二百五十戒。比丘尼小三百五十  
戒ト也。



此の諸戒を鏡規とて。諸宗の祖師聖人と云、徇く僧とち。  
古今に僧尼を照し觀る。よく其法規ふ叶へると見ゆる  
は。吾いまづ此を見ん。近くを名義集。釈氏要覽。大藏法數  
といふ。記せる戒の處を讀み。古今に僧尼の行狀ふ合せ見て  
知るべし。

此餘に誡めし條禁戒は條くは。限なく多うれど。此禁を持ち  
しるも。彼戒を得持し。彼禁を持ちしるも。此戒を持ち敢て  
破戒ふ坐し。常小口實とせる幻説。やがて因をあり。然る妖魔  
の果を感得し。自法やがて自縛とありて自縛し。自業の自刑  
を自得して。自造の惡道小歸し。妖魔の部屬と成こと。佛子

と云へども人子ある。甚も悲き因果ありかし。

金剛三昧經に。自念起相。自繫縛。以繫縛。故則是地獄。雖非是  
有。而令受者受。彼苦云くと有るを。即此義を明せる説あり。  
此を尋常に靈鬼とは。其因縁異ふ。佛道有し以來。やがて  
其道小よて化す。其事を行ふ妖物あれむ。彼道小用ふる魔  
字を用ひて。釋魔を稱ふあり。然るは此。或舊く。天魔とも天  
狗とも稱へまとも。天魔と云を。上論へる如き物あれむ。釋  
子の化れる魔の號ふを當らば。まづ此を天狗と云ふ。依事も。  
佛經等小無れむ。其は早く無住法師が砂石集小。天狗と  
云ふ。と。聖教に慥なる文を見及む。先徳の魔鬼と釈せる是



小や。天狗と云ふを。日本人の云ひ習はしき。佛法者の中。破戒無慚の者。多く此報を受く。我相憍慢名利諂媚等此業を。佛寺に交ふるは。定めて此道に入らざると云ひ。

埃囊抄に。天狗と云ふを。聖經の中に見及む。砂石集に云。了れど。古徳の釈に。天狗者。天光明義自在義。則表佛果。狗痴闇義不自在義。示生界。則是生佛不二名也。また。天曼荼羅。是金剛界。狗地曼荼羅。則胎藏界也。殊小聖教中。天狗と云ふ。魔王所部の從類あり。妙善王。金著女也云々。天狗首也。也。見えしり。と云ふ。了れ。却て覺東あし。延命地藏經といふ物に。天狗土公大歳神と云ふ事あり。此を正しく俗小

云ふ天狗を云へるあれど。此經を此方にて偽作せるあり。を。證とは成らざ。ま。或人正法念處經觀天品に。有大光明遍虛空中。如火炎熾。如大天狗。從天而墮。云々。彼天狗量五千由旬。一切虚空皆悉。炎然とあるを。世にいふ天狗の本文ありといふも。此を天上の光物に事。初に引く史等に。天狗也云ふ。小效ひて釈せる文あり。妖魔を云へ。非れを。是ま。謂ゆる天狗に證とは成らざ。谷響集にも。此邦天狗從我教見之。魔類也。此邦何謂無魔哉。凡出家人無菩提心。我執憍慢。專求名利。經名魔業。如是之曹。當作天狗也。と云ふ。



聖賤集ふも圭峯此孟蘭盆經疏子橫行曰畜豎行曰鬼と釈り日本の天狗を山伏の如くみて豎行をるなり是鬼の形あり也云へり此も無住法師が書あり也。

はて魔業といふ事は華嚴經離世間品を忘失菩提心を修諸善根是為魔業於甚深法心生慳怯有堪化者而不為說若得賤利恭敬供養雖非法器而強為說是為魔業樂學世論巧述文詞開闡二乘隱覆深法是為魔業增長我慢無有恭敬其心弊惡難可開悟是為魔業とあり也。

空華老人の名義考も此文の半をひきて眞實の道念無して或を我慢勝佗によめ或を名聞利養に為す善根を修

まる者多し正しく魔道に入依の正因あり此經文信子天狗道の證文ありと云へるは實然るなり也

はと大虛空藏所問經小不護菩提心是為魔業於諸有情簡別行施是為魔業樂求生處而持禁戒是為魔業為求色相而修忍辱是為魔業作世間事相應精進是為魔業於禪味著是為魔業以慧厭離於下劣法是為魔業在於生死而有疲倦是為魔業作諸善根不迴向是為魔業厭離煩惱是為魔業覆藏已過是為魔業背恩不報是為魔業不求諸度是為魔業慳惜於法是為魔業希利說法是為魔業離於方便成就有情是為魔業毀破禁戒是為魔業順聲聞行是為魔業順緣覺乘是為魔業要求無為是為



魔業。厭離有為是為魔業。心懷疑惑不利有情是為魔業。好疑不通達是為魔業。好懷諂誑假示哀愍是為魔業。廣橫惡罵是為魔業。於罪不厭是為魔業。深著自法是為魔業。少聞便足是為魔業。不淨心口是為魔業とも見ゆ。

但しおむ甚く文を省きて引たり。委くは本書を見及し。

ゆゑ釋氏要覽に。魔逆經ある魔事といふ事を釈し。瑜珈論を引て。魔事者於利養恭敬稱譽心樂赴入。或放逸慳悋廣大希欲不知喜足忿恨惱覆矯詐等。皆是魔事と云へり。

まゝ大般若經に。魔事品あり。楞嚴經に五十種魔事を説り。色受想行識小。各十種ある由あり。披き見るべし。

此等此文を見通して。古の名僧の中に。戒行を持とて。名利の爲小。善根茂修せる倫を稽ふる小。まは古く世に聞えあるを。道昭和尙あるが。此法師の事を。文武天皇紀四年三月己未。日の下。道昭和尙物化。天皇甚惜之。遣使吊賻之。和尙河内國丹比郡人也。俗姓船連父惠釋少錦下。

船連の姓氏録右京諸蕃下。船連菅野朝臣同祖阿太郎主三世孫智仁君之後也。又云菅野朝臣出自百濟國孝慕王十世孫貴首王也と有りて。百濟人の末裔あり。惠釈を皇極天皇の御世に。蘇我臣蝦夷が誅せられし時。國史を悉焼らむと爲し。茂火中より取出る人あり。少錦下也。孝德天皇の



御世小定られし位あり。

和尚戒行不缺尤尚忍行嘗弟子欲究其性竊穿便器漏汚被褥和尚乃微笑曰放蕩小子汚人之床竟無復一言焉。

史ミナミはかく戒行不缺と有れ也其靈の語り一生の中ウチ戒行相應せば破戒の罪重しと云られむ缺カケし戒行も甚多イトオホか正しと見也。

初孝德天皇白雉四年隨使入唐適遇玄奘三藏師受業焉。

今昔物語集小も此僧の事を記して智廣サトヒロく心直し道心盛サカリ小して佛の如くあり然れむ世人公よ正始免上下の道俗男女首を傾りて貴タテひ敬ウヤへること限カギリナ無し而シカる間マヒ天皇道昭

を召て仰給オホセタマえく近來チカゴロキ聞キは震旦小玄奘法師と云人有て天竺小渡タ正教を傳へて返來カキキタると其中ナカ大乘唯識といふ法門有りと其教法いまマ此朝ココみれし汝彼國へ罷渡りて彼教法を受て返るマ道昭ミチアキラ宣旨を奉ウケタマて震旦小渡タ正ぬと有ア但し其傳の中ナカ唐土タカラキ逗留の内ウヂ新羅國シラキ渡り役ワタリ小角カク相見せる由を記せ旅アツリを誤アヤりそは佛仙のところ小角カク傳の中ナカ辨ハへしを見るミ。

三藏特愛令住同房謂曰吾昔往西域在路飢乏無杖可キ乞忽有一沙門手持梨與吾食之吾自啖後氣力日健今汝是持梨沙門也。



佛經の定水る因縁の幻説を效て。玄奘法師が幻説せるれ  
正。まゝ若くは。道昭法師が幻説せるを信とあて。史小記さ  
れある。左まれ右あき。妄幻の説あれむ。信を捨くらむ。  
又謂曰。經論深妙不能究竟。不如學禪。流傳東土。和尚奉教始習  
禪定。所悟稍多。

たき皇國の僧也。禪法を習へる始めなり。

於後隨使歸朝。臨訣三藏以所持舍利經論咸授和尚。而曰。人能  
弘道。今以斯文附屬。又授一鐺子。曰。吾從西域自所將來。前物養  
病無不神驗。於是和尚拜謝啼泣而辭。及至登州。使人多病。和尚  
出鐺子。煖水煮粥。遍與病徒。當日即差。既解纜。順風而去。比至海

中。船漂蕩不進者七日七夜。諸人怪曰。風勢快好。計日應到本國。  
船不肯行。計必有意。卜人曰。龍王欲得鐺子。和尚聞之曰。鐺子此  
是三藏之所施者也。龍王何敢索之。諸人皆曰。今惜鐺子不與。恐  
合船為魚食。因取鐺子拋入海中。登時船進還歸本朝。

佛法の幻説既小。靈ある物の生とし生るは更あり。金石草  
木小さず及ひ。喧響立てあ依故り。かゝ依異驗を有れり。怪  
む。子足らむ。猶次く小も。斯る事の出くらむ。処く小云べし。  
於元興寺東南隅。別建禪院而住焉。于時天下行業之徒。從和尚  
學禪焉。於後周遊天下。路傍穿井。諸津濟處造橋。乃山背國宇治  
橋。和尚之所創造也。



是本朝の禪といふ佛法を行ひし始あり。委くは印度藏志  
小云有りき。まゝ宇治橋成造れるを。後世までのよた功  
あり。然れど其は。名聞利養の心有りて為るる。魔道の落  
因縁ありしと通えり。

和尚周遊凡十有餘歳。有勅請還。還住禪院。坐坐禪如故。或三日  
一起。或七日一起。儻忽香氣從房出。弟子驚怪。就而謁和尚。端坐  
繩床。无有氣息。時七十有二。弟子等奉遺教。火葬於栗栗一本原。  
天下火葬從此而始也。世傳云。火葬畢。親族與弟子相爭。欲取和  
尚骨。斂之。飄風忽起。吹颺灰骨。終不知其處。時人異焉。有記。  
今昔物語集。道昭が唐土の玄奘法師が許小居りし時。

玄奘が弟子。其宿房を竊小伺。道昭が口より光を放ち  
と云ひ。死期も兩牙よ光を放ち。壁を透して庭  
松を照し。良久して。其光西を指て去。依由見は。靈異  
記ある。常昭が事を錯て傳へる物あり。元亨釈書小。や  
がて其錯を受て記せれ。云。小足らば。常昭が事は。屍解仙  
の処。小云。釈魔の態として。かゝる異を示はること常  
あり。怪むべき。小非。又釈書小。弟子思其兩牙放光。欲收之。  
而先為鬼神取去。閣毘之後。欲取其骨。暴風忽來。骨灰共失。と  
有るは。國史の文。依て。撰者比例の妄説を加へるあり。  
國史。如此を見え。と。此僧案小。破戒の事とも有り。



て魔道オチ小落カサギり。然サるは明慧上人傳といふ物也。或時上人云く。去イニころ笠置カサギ此解脫上人來臨して語りらく。

解脫上人とは。釈負慶をいふ。少納言入道信西の子あり。建曆三年二月三日。五十九歳ミて寂せり。此ニ古事談ハは。辨入道貞憲ハが子と云ヘ。明慧上人とは。釈高辨をいふ。

秋ニ比明カ小晴ハレくる夜ハ。人數ヒト來る音ネして。草菴クサマの窓マドを叩タき。謁タテマツせむ事を望ノゾむ。扉ヒラを開ヒて出向イふ。異類異形ヒ者トモ其數あり。正タき。其中ナ然サレべき仁ヒトと覺オホしくて。雪ユキの頭霜カシラの眉マユある老僧。香カ深シの衣キを著キて。面貌オモテ事コトがら此世の人とも覺えぬサマ体サマにて。進寄スミヨリて語ナ云ク。定チカ免マて聞及ヒ給タらむ。我ワを往時イニトキ何某ナニガレと云ヒし者あり。

按オぶるハ小文勢フシサマを見ミゆハ。此時老僧ナその名告ナせる事疑ウタれし。然シれモ此傳カ字記シせる人の。此カを傍痛カタハラシメき事コトあれハ。憚ハヤてハ態ノチと名ナをば著シらハ。依ヨり。其コトは同ナじ佛道の人形ハをばあり。さハはハ佗ホカよシて何ナニう憚ハヤらむ。誰タレあらむと考カふハ。後ノチきレ也。

佛法オキキ小於オキて也。隨分オキ小行學トシツモ年積トシツモりて。深理シムを究キるハ由ユを存タじき。然シれハ其頃オキ天下カ下カ肩カを並ナぶハ。輩トモ无ナりキ。皆ナ是世の知チ所トれ也。然シれハ唯タ此大乘オホの本源ホノ也。究キめむ事コトを先マとシて。強オホく戒イを專オホとシる事コト無ナりキ。仍オて破戒オホの事コト耳ミありキ。其故ナニか大乘オホの本源ホノを究キるハれハとも。一生オホ此中オホ戒行イ相應オせハ。破戒オホの罪ツミハ方重オホ也。小依オホて。魔道オチ小入オチ也。古オよシて天竺オ震旦オ本朝オ。名ナを得エる



貴僧高僧と云。此戒力あた人。一劫二劫。まゝ三四劫も。此魔道  
小落と云類。あげて計たうらま。此魔道の習ひ。一度落ても。急  
子免れ出隊事難し。我を二劫小此業を果すべきあり。入滅の  
後五百餘年小及べば。久しれた心地し給ふらむ。

按ず依り解脱房を。順徳院。天皇乃建曆三年也。建保と改元  
有し二月寂せまば。此老僧の靈れ來りしを。其よと後ばり  
と前ありらむ。姑く解脱房が寂せる年也事として。靈れ語  
小依て。五百餘年を操上りて。その頃小大乘の經旨を極め  
て。其せり肩を並ぶる者なく用られ。加於長命れりし僧也。  
誰あらむと考ゆ小。道昭法師もぞ有る。其を上小擧と云

文武天皇紀了。四年二月小。此僧の物化せる由り也。其年よ  
と建曆三年まで。其間五百十四年あり。

然れども其五六百年を。万億重孫ても。猶其一劫小も及ぼら  
らま。況や二劫を過へき末哉思ふ。味氣あき事れり。我を大  
乗の義を明えし小依て。此業を償ひ果てば。佛果を證はべけ  
ま。多劫の間徒り。苦患のみ沈して過行と。偏り戒律の  
闕る故あり。今見依り末世あれども。道を修はる志深切を  
る類あり。此を人間小普く示し知しめ度て。此菴室小列參せ  
り。後學小傳へ誠め給ふ也。

今按ず憐むる。道昭此道小落ても。れを末其道やがて。佛



祖の假説有しよ。出來たる道あり事な悟らば。佛果とて  
異小證すべき道の有て。多劫を経て。其道小至らゆ事  
此如く思ふは。早く先輩此其道小入りて在るが。ある誑  
惑はるを。實と思ふ也。佛法の極意を。即心即佛即身  
即淨土にて。説得べき道も。行ふき淨土も有とれきを有  
と示さる淨土は。其もやぐて佛祖此假説有しよ。姑く妖  
魔の変現はる淨土にて。彼も此を神の道よと云とたを。魔  
道を免れ。然れと其を因縁小引きたる。迷惑心小こそ有  
れ。我が苦道小落たるを前鑑と為しめ。後人ヲ戒を持しめ  
て。我が落たる悪道小を落さじや。かく態と列參して心を

添たる志を。發露懺悔の意も叶ひて。殊勝あり。已。  
とて此は某彼を何某と云を聞く。古み名を得しり。僧  
侶等あり。今ハ既り佛果小至ぬらむと思ひし人等此。如何し  
て斯を成ぬらむと。不思議に覺えて。偕如何なる御苦う候と  
問はるは。或を諸の異類此者來て。身の肉を食ひ命を奪ふ  
其苦小堪ばして絶入て。暫く有りま生れむ。まゝ異類現じて。  
頭目髓腦手足を截取する時も有り。或を猛火現じて全身を燒  
く時もあり。是れをち殺盜淫の果あり。或は黑白の二鬼現  
じて。鐵箸を以て舌を抜き。或を熱鐵を吞しめて。遍身焦れて  
炭の如ある時も有り。是妄語飲酒非時食此果あり。此の如



苦み。一日小三度五度。人シカも随シカひ時トキの依りて。様サマく小換カ依カあり  
と云ひて。搔カキ消ケスやう小失ウセと云ふとぞ。

是までは解脫房が夢ユメ。道昭の靈と對問せる有趣アリサなり。以  
下を解脫房が云ふ依言を。明慧房が弟子小語れる趣あり。  
三熱クシれ苦クシの事コト。下小別ワ論ロふを見よ。

此事を思ふシふ。是實語あり。尤慎モトメむべき事あり。今は諸宗を學  
ぶる者有れども。戒を知れる輩トモハあし。況や受持トモする類タガヒなや。  
今を姪酒シメを犯トらるる法師も希ヒ小。五辛非時食を断タつ依僧も  
れし。是コトの如カき不當不善フシれ舉動スベをもて。法理ホウを究ツととも。魔  
道マ入イるは。多劫の間苦を免トれず。如何ニして。戒門ケを興行キョウす

法ホウき方便ヘンを廻マさむと云れし。大オに其コノ謂イ有りと。明慧房が  
語れる由見えとぞ。

文モノといふく約ツめて舉アげまは。委オくハ本書ホンを就ツて見る法ホウし。  
明慧房と解脫房が事は。あや別ワ小考コウあり。下小云を見よ。

此來れる靈の語コト。入滅の後五百餘年と云ふる年數ネン。まゝ其  
頃トキ天下小肩カを竝ナぶる輩トモ无ナりきと云へ依語イ。まゝ大乘トを學マふ  
ゆと云へ依語イ。まゝ雪ユキれ頭霜カウの眉メイある老僧ラウれ。香カウ深シの衣イ著シふ  
よ也ナ有アいと哉ナ合カせ考コウふる小。道昭法師ダウれらで誰タり有アらむ。  
禪ゼンを楞伽經レウをもて第一ダイといふ。是コト大乘トといふ經キョウ。此中コノも。  
最トモなる物モノあり。物化モノの歳サイ。七十二歳ニある也ナ。上カミり舉アげ



傳ふ見えぬ也。

此僧の父を船史惠釋とて。國史に大功有りし人なり。其子とて。過りて釈子を成す。かく流苦を受る事は。いと憐むべき事あり。然れど釈魔の曲れる心。持たず。後學の心を添ふる也。今昔物語ある。此僧は傳ふ。心直しと有流符ひて。殊勝なる事なり。

まゝ按ふに砂石集ふ。伊勢國の或山寺に。如法經行ひらる僧の弟子は。兒佗地ともれく失せて見ざりけるが。一兩日過て堂の上ふて見付たる。正念もぬく見ら流る。暫して本心を成ぬ。さて語り流る。山臥共誘きて。時の間。筑紫

の安樂寺といふ處の。山中へ行ぬ。老僧の八十餘あるが。世よ貴氣ふて。其中に尊者と見しが。何れ兒あり。来よとて。傍に置て。あ奴原を所詮なき者ぞ。此に居て物見よと云ふ。頼しく覺えて見る程に。山臥ども舞躍りらる。網に様ある物空より下りて。引廻き様見ゆる時。山臥ども興覺て。北むとほる小葉を交。網の目より火然出て。次第に然上て。山臥ども皆焼て炭灰なる也。暫ありて又本の如く。山臥に成て遊ひら流。老僧あは山臥是へ參すと呼て。いり小和山臥よ。おの兒を具して來し。疾く本に山寺を具して行くと云きは。恐るる氣色ふて。具して歸ると覺於



ると云りてと有也。此老僧其殊勝子聞ゆるは。若くは是も  
道昭小は非ざりし。然らば七安樂寺を開基せし法師  
ぞ有りり。年。

儲まゝ名聞利養の爲小。矯詐の説を構へ。我慢して。廣大の  
希欲を發せるは。行基和尚を最速りて。依。

其を四十九處に寺を建するは。忘失菩提心。修諸善根。而  
魔業あり。大僧正の位を受け。四百人の出家を賜れるは。於  
利養恭敬稱譽。心樂赴入。よて魔事あり。邪淫。犯して。孽子  
を生給へる。光明皇后小菩薩式を授けたるは。得財利恭敬  
供養。雖非法器。而強爲説。て魔業あり。殊小具足戒を受

る身ありて。畏くも伊勢大御神の託宣を偽作して神を誣し。  
皇を誑惑せる大妄語を吐て。國家に道の大義を乱せり。尚  
勝て計ぐる。魔事魔業を多かる。其は巫學談弊小記せ  
るを見る。及し。

後小出ふる。最澄法師も。此小効ひて。廣大に希欲小。比叡山を  
物し。大伽藍を申し行ひ立て。天皇祖神の古傳を乱す。大妄説  
を作して。彼山の本縁と成し。宇佐八幡宮。賀春神。諏訪神。と  
此妄説。成作して。是魔業あり。

其を八幡宮。法華に法味を好給ふと託宣を偽り。賀春神を  
半身石の如き梵僧ある。此も法味成好あると云ひ。諏訪



神小も然る妄説を作れり。此事も委くを巫學談弊子云。はと此僧の魔道小落りり。と覺ゆる事は。神社考小。慶長甲寅夏。叡山僧侶到駿府告衆曰。頃叡山有奇事。覺林房奴二郎者。一日忽失經數日。歸人問何之。奴曰。有人將我去到伯州大山。已而登筑紫彦山。於是大山彦山之山伏相共歸。時人々自愛宕鞍馬比良來會。有一僧自上野國來。座定鞍馬僧正曰。久無奇怪。東州西州合戰今其不遠。愛宕太郎曰。如何。叡山次郎曰。東方必勝。其勢既見。言已各歸本山。我今見之。諸人不信。幙下聞而奇之。後果有大坂之軍。自古民之訛言時之童謠。史之所載。今亦奇哉。云。れと。此叡山次郎と云ふ者を疑ふ。最澄法師の釈魔と為

ま依よとの稱ありと聞えと。て。

或人れ説了。次郎坊を云ふは。舊く叡山小住める天狗にて。最澄法師の靈小は非交と云ふ信られ交。抑皇國了固よと有る枉神と。僧徒の化れる釈魔とを考ふる小。同類の物小を有れ也。其所業は別な依事あり。此次郎坊太郎坊が如き。其事跡を思ふ小。釈魔ある事疑ひあり。猶云は。此法師等より以前小。其名の聞えざ依を以ても知れし。

猶近く思ひ合さ依る事は。櫻町天皇の元文五年小。比叡山の西塔釈迦堂御修理有る小。奉行を江州信樂ある御代官。多羅尾四郎左衛門といふ人也。大津ある御代官。石原清左衛門



といふ人勤ツトメられりるふ。石原ぬしの家頼ふ。木内兵左衛門とて。三十餘歳の人有りしが。三月七日に申時ふと行方知れず成しうば。方くを尋ぬゆふ。彼者の履ハキは下駄。行榮院といふ寺の玄関前と。内庭とよ片足カチ落てあり。奇みアヤシき見るふ。庭れ角スミある辨天の祠ヤシロに處る。脇指鞘サヤを碎クダりて。身は鎧タビ鈎ツルの如く曲カガり。脇指ツビ添ツヒりる小刀は。三ツ折てあり。ほと其辺小下帯も三ツ折ツきれて有けむ。人々天狗の業ワザと心得て。たかかしく尋ぬるふ。兔角見えざぬ故に山内此寺くみても。祈イリを始めて。慈慧大師廟を始め。魔所といふ所く。其人を分て尋りゆ。慈慧僧正の名は。良源や云ふ。世よ元三大師と稱ホる。是は

了。其廟を叡山の内。横川ヨガハと云ふ處に在て。其處ココは今も大魔所と云ふや。猶お此僧の事は。次卷の始シ載ルせり。其夜丑刻前と覺オボし。死頃イヅクふ。何處ともなく。大風の吹フクおとく大音オトふ。頼タノまう頼タノまうと呼聲ヨブコエきお也。折しも大雨あるふ。山をれや雪深く。物の何やも見こぬを。鈴木七郎と云ぬ人。彼聲を尋タひて。釈迦堂に庭ニハふ出て見るふ。堂の箱棟ハコムネ小羽形ハガタあり。異形のもれ立居て。恐オソろしや下オロして給タれといふ。七郎言葉コトバはかけて。兵左衛門あてはあきやと問トふ。然也シカナリや云ふ。能く見る小翅コハと見えしを。破傘ヤブカサ披ヒラきかけするふ。かくて人々よ集ツり。四郎兵衛といふ働タシキの者。棟ムネ上りて。迎ムカひ小來れと云



牙は。兵左衛門忽タキナキ小無性コムシヤウ小れ也。持モチる傘カサを捨スツて。爰コト小四郎  
兵衛也。兵左衛門を背セねひ。帯オビおてりて。腹ハラをひ小形コガタめて下  
りる。三日ミツのりて本性ホウシヤウなるは依ヨ後ノチに問ト牙は。七時シチジを覺オボし死  
比ヒ。何處ナニトコロとも形カガタく名ナを呼ヨビりる也。外ソト小出シる。玄関ゲンカンの前マエに。小  
法師ホウシヤウ一人ヒト黒衣クワクワ小短ミヅカきく。袴ハカマを著キて。兵左衛門とよぶ。彼  
處ココ小至シれむ。又一人ヒト顔カホ赤アカくて黒髮クロカミ成ナリ乱ミダし。引ヒキ去サ依ヨをうりて。見  
えて。裝束ソウソク成ナリ著キ居イて。玄関ゲンカンの屋根ヤ根ネへ上ノボる。信シんズ云イハへる故ユ。  
主人ヌシある身ミあれむ行ユキかしと。脇指ワキサシ小手コテを懸カケむとせし。小彼  
異人イニ也ナリも奪ウバひとて。投付ナゲツキする其時キトキに。鞞サヤクダ碎クダけ。身ミを鐺ナベヅル鉤カケのぶ  
とくれまて。

今思イマふ。兵左衛門ヘイサエモンがいハいハ分ワケ甚シ理リある哉ヤ。天狗テウコウの所レ為ニいハと  
く不フ當トウあり。然シカるは挂カケまくも畏カレ死シ天皇テウコウ小代コトて奉ホウらして。天  
此下ココノの政シヤウ治チをし給タマふ。征夷テイイ大將軍ダイシヤウに台命タイメイを蒙カシりて。此普請ココノ  
の奉行ホウギヤウする人ヒト小。其事コトあて仕ツカふ依人ヨヒニを。即公武ソクコウブ乃御用ノミヨウを勤ツト  
むる人ヒトも。其帶オビはる兩刀リウタウ。やがて其士シの面目オモテする物モノれま  
は。人ヒトく私シれ物モノは非ヒ也。然シカるを天狗テウコウ慢マン也。小。それ魅術ハチマキを以モ  
て。斯カ依ヨ無道ムトウのわざを為ナせ也。凡スベテも世ヨに帶刀オビタウを依ヨ徒ト也。その  
帶刀オビタウある所以ソノに本ホを思オモはる。身ミの飾カザリ或ナラバ人ヒト恐オソしれど。此  
如カく心得ココロエするが多加タカ也。能スベテく其帶刀オビタウはる所以ソノを知チて。帶  
せむ。天狗界テウコウカイと云イハへ也。是コトも。天皇テウコウに志シらる。國內クニノの幽界ユウカイ



あまは。天狗らいうで。然る不當を働くは。兵左衛門實體者と云へ。此旨を知らむ故。天狗のちる無道逢ふりむかし

下帯を取捨よと云ふ。此を免し給へと云ふ。是非小捨は。少いふ。此戎を。彼異人は杖小か。流を見えし。三つ切れ。然して玄関。此屋根へ引上て。此方の申分を背く由云て。杖ひて散く。小打擲し。流時。長一丈計めと覺し。此高僧の。紅衣戎著し。あるが來。叱。免て。何やらむ密語く。見えし。其時を三四間も隔て見えける。六人ばかり有しと覺也。かくて異人。我と伴ひ行。しと云ふ。背きては

悪う。あむを思ひ。差圖。小從ひけれ。是は乗べし。とて。丸き盆のおとき物を出せ。是は乗り。是は。彼小法師。兵左衛門が肩。小両手をかけ。下へ押しけられしと覺えり。其地を離れ。虚空へ高く上り。依。

この謂ゆる高僧。即延曆寺。此開山。傳教大師最澄と聞え。其由を下に評論。小云ふを見て知るべし。あ。丸盆の如き物。小乗せて。伴ひ。と云。此を。叡山天狗。凡人を乗躋せしむる術と聞え。あり。神仙。小種々の乗躋術ある。小準へて思。是は。叡山天狗。かく。流乗躋術。何らむ。此も。疑ふ。非。



然らば秋葉山へ行<sup>コ</sup>しと。虚空を飛行し。行方も知らず。海の上を通り<sup>よ</sup>らる。餘<sup>ア</sup>も恐ろしく思ふ所<sup>ニ</sup>。彼高僧出て水不能漂と云へむ。恐<sup>オ</sup>ゆるらる<sup>ル</sup>らと示せる故<sup>ニ</sup>。眼を塞<sup>フ</sup>じ通り<sup>ラ</sup>らむと。海も其<sup>ト</sup>終<sup>ト</sup>見え<sup>ラ</sup>らむ。さて秋葉山と覺<sup>オ</sup>えて。山上小至<sup>リ</sup>て見る。小十丈計り深<sup>カ</sup>き谷底<sup>ニ</sup>。小<sup>ニ</sup>火炎上<sup>ル</sup>る。異人云<sup>ハ</sup>らるは。汝此谷へ飛<sup>ト</sup>げしと有<sup>シ</sup>ども。此<sup>ノ</sup>火炎の内<sup>ニ</sup>。落<sup>オ</sup>ちむ。燒<sup>ヤ</sup>死<sup>シ</sup>べしと恐<sup>オ</sup>惑<sup>ト</sup>ふ折<sup>シ</sup>しも。高僧出て。火不能燒と云へむ。恐<sup>オ</sup>ゆるらる<sup>ル</sup>らむと示<sup>セ</sup>せり。眼をふさ<sup>ジ</sup>て飛<sup>リ</sup>れむ。五六疊計りの平<sup>ク</sup>な<sup>ル</sup>崖<sup>ニ</sup>。岩の上<sup>ニ</sup>。小立<sup>ト</sup>止<sup>メ</sup>りぬ。此文小據<sup>リ</sup>りて攷<sup>ル</sup>る。小<sup>ニ</sup>水不能漂。火不能燒とも。法華經の文<sup>ヲ</sup>りて。傳教の始めて立<sup>テ</sup>らる。天台宗旨に要語あるを。加

く教<sup>ヲ</sup>り<sup>テ</sup>と聞え<sup>ル</sup>る。儲<sup>カ</sup>くの如く。人<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>恐<sup>ル</sup>べき事を。強<sup>シ</sup>て爲<sup>シ</sup>めて。人の心を引<sup>キ</sup>見る。と。神仙も亦<sup>モ</sup>此<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>ある。其<sup>ハ</sup>は深<sup>キ</sup>き由<sup>リ</sup>ある事<sup>ニ</sup>。天狗を殊<sup>ニ</sup>に<sup>シ</sup>て。自<sup>レ</sup>樂<sup>ム</sup>みと爲<sup>ス</sup>る事<sup>ニ</sup>。その例<sup>ト</sup>いと多<sup>ク</sup>り。

彼<sup>ノ</sup>異人<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>。暫<sup>ク</sup>休<sup>ム</sup>み。ま<sup>ニ</sup>妙義山。彦山。鹿嶋<sup>ニ</sup>。とへ行<sup>ク</sup>。其<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>何<sup>レ</sup>國<sup>ト</sup>ともれ<sup>ズ</sup>。諸<sup>方</sup>見<sup>ル</sup>物<sup>ヲ</sup>致<sup>ス</sup>せしあり。此<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>。兵左衛門思<sup>フ</sup>やうは。既<sup>ニ</sup>十日餘<sup>ヲ</sup>。經<sup>ル</sup>ぬらむと思<sup>フ</sup>。何<sup>レ</sup>卒<sup>ニ</sup>暇<sup>ヲ</sup>給<sup>フ</sup>れ<sup>バ</sup>しと云<sup>フ</sup>。兵左衛門<sup>ハ</sup>天狗<sup>ノ</sup>小誘<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>る間<sup>ニ</sup>。一日一夜<sup>ヲ</sup>。形<sup>ヲ</sup>り。大<sup>ニ</sup>幽<sup>ク</sup>界<sup>ノ</sup>小伴<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>る。多<sup>ク</sup>の日數<sup>ヲ</sup>をも。志<sup>ハ</sup>はし<sup>ノ</sup>の間<sup>ニ</sup>ありと思<sup>フ</sup>ふ事<sup>ニ</sup>。十日餘<sup>ヲ</sup>。經<sup>ル</sup>と<sup>レ</sup>りと思<sup>フ</sup>へる。甚<sup>シ</sup>い<sup>ニ</sup>ふ<sup>ク</sup>し<sup>テ</sup>事<sup>ニ</sup>



あり。仍て思ふに、神仙の幽界入りあるは、久しき年月故も短しとし。妖魅此界子伴をれと成る。暫時の間をも、長しと思へるみや。此を猶考ふべし。

時小白髪の老人出来り。然らば金銀を出さばしとて、大判小判。一步小間銀。山も下小臺子載せ。此金銀何程遣ひても、絶る事とは無き由ありて、給る時。貴僧の云はるは、其金を受取らば、其方二人は伯母の命。一年移縮るべしと云ふ。兵左衛門申さハ、有ぐとくは候へども、伯母は命縮ま依事。歎きはしけしは、断り申度とを云はる。

此、白髪の老人も、貴僧の眷属を依事は、云ふも更なり。此

人間ありて用ふる金銀を、大く用ひざ依事と聞ゆるに、此天狗界には其定ありや。斯むより多く此金銀を與へむと云し。いと。是ま不審し。此事ありり。

異人又云々。其方奇特ある者なり。然らば一生安穩小暮に様なる。秘密の薬法行法を傳授す。其薬種の内一味を、當山より外に。調合の節登山致さば、必是を授くべしとて、薬法書付給を。此事必人知らず。先三年此内を、身心清淨して、別て女の不淨を堅く慎み、行法を懈怠有べあらば、三年過て後、妻は語らひ有るは、苦うらや。然し薬調合の節も、行法堅く守るべし。汝正直な依故。是を傳



ふと示されり。偕其方をかく誠むる事は。摠ての人とも心  
悪しく。山を麓末小致し。何れ心入の諸人子見せ去免れ為  
あり。歸る後小。此趣を諸人子傳ふ。最をや歸し申に及し  
とて。丑の刻むり。覺し。高山に峯小れろさ。如く  
覺し。本堂に棟あり。其後ハ彼異人あり。此行方あらは。  
時小先。貴僧大音。て呼る聲。山河を。くばり。覺  
えり。其時兵左衛門。かく吾を。救はせ給ふ御僧を。何  
人あり。渡らせ給ふ。やと尋し。我を此山より九百年來住を  
や。云。夫より。働の四郎兵衛と云者來て。某を捕へし  
と覺ゆ。彼貴僧も行方知らず。吾も夢中。成ぬと。語

り。其時の事ども。親しく見聞し者。の記し。比。巖山天  
狗之沙汰。ち。書小見え。此を近頃。事れ。い。正し  
き筆記と所思。故に引出。於。

上。件の事ども。熟考。彼の夕ノマウ。と。呼は。  
兵左衛門。小。非。謂。貴僧。呼。聲。依。明。  
了。偕。我。此。山。九。百。年。來。住。と。云。牙。依。由。る。小。依。  
此。を。疑。く。傳。教。あり。とは。知。られ。あ。然。る。を。最。澄。法。師。の  
寂。せ。る。は。嵯。峨。天。皇。に。弘。仁。十。三。年。小。て。元。文。五。年。小。至。り。九  
百。十。九。年。あ。れ。む。其。年。數。い。を。能。く。符。へ。其。は。佛。法。出。世。間  
の。説。極。樂。往。生。の。説。と。も。小。其。道。に。妄。誕。小。て。其。道。を。首。張。せ



る。謂ゆる高僧祖師とるも。出世間を更あて。往生はと云ふ。極樂世界の説も妄ふ依故。死しての往方は。即此世間の幽界にて。佛祖さへふ。其靈の行方は。常在靈鷲山あれむ。況てその末派此僧徒を。其在世中小。甚く執せる山く小常在して。天狗と成りて在る事較著し。然れむ傳教の處山。常在在る事。云ふも更れり。儲是よて三年をたて。兵左衛門其行を乱し。茶屋女と志のく。此事ありて。非業れ死を遂とめと云む。謂ゆる心中や云はうれき死を為とめと聞ゆ。哀と兵左衛門は。天狗小る妙法の傳を受ざらほしうば。元よての貧浪士。其直情正行を。世のかぎて遂げ小る。

むを中く小妙法の傳を受て。欲する俵。黄金を得りむ故。其行を乱して。然る非業の死を。遂とるあり。抑始免兵左衛門哉。天狗れ誘ひ出せる事を。元來兵左衛門。過失ある故。非は。餘人らが不當れ行ひある哉。諫めざるが憎しとて。誘ひ出して打擲せ依が。不當ふ依を更ふも云は。彼高僧の叱り小。其過ちを悔とる趣ありて。後兵左衛門が心を慰めむとよや。伴ひて。諸國の名山とも見せめをれ依。猶氣れ毒うや思ひらむ。呪文をも教へ。まゝ用ふる時を。伯母の命を縮むべき。金銀を與ふむとし。其をも辞めむ。終は身成非業小亡む。基縁とある藥法依與へて。盛



壯の男子。不淫戒を三年禁し。それを禁し敢て。然る  
非業小死しめたるは。何小天狗の枉ら。形ら。或や。れ。此  
事委くは。本書小就て見る。○ま。沙石集を見む。洛  
陽。或女。靈病。何。種。小。祈。れ。も。有。驗。の。者。を  
も。欺。き。笑。け。む。力。及。ば。で。打。捨。り。り。彼。云。く。佛。法。は。眞。實  
の。道。心。何。て。あ。そ。生。死。を。離。れ。悟。を。開。く。事。あ。ま。何。小。學。し  
行。れ。れ。も。名。利。執。著。の。心。何。り。て。實。の。菩。提。心。形。れ。ら。魔  
道。を。出。交。我。一。代。此。聖。教。一。も。不。審。あ。く。知。れ。了。然。る。小。道  
心。れ。く。志。て。今。小。出。離。せ。交。僅。小。紙。一。重。隔。り。て。覺。也。依。あ。了。  
我。を。天。台。山。の。立。始。了。し。時。の。者。あ。了。と。語。る。さ。て。當。世。の。智

者と聞ゆる人の事を問へむ。皆云甲斐なく云へ了と有り。  
是も彼最澄法師に靈と聞えし事。

次小空海僧都。あれも行基最澄が妄説の效ひ。廣太の希欲よ  
高野山を竊して。其山の神を誣する。妄語せ流。魔事なる小。  
樂學世論巧述文詞。諸佛を讚。摩訶毘盧舍那とい。佛  
語小。天竺を更あり。漢籍小も曾て見えざる。大日佛を云ふ佛  
名を偽作し。翻て。摩訶毘盧遮那經を。大日經と譯し。其本縁よ。  
畏くも天照大御神を。己が偽名の大日佛を。人の思ひ紛ふ。虚  
き幻説を巧み出し。

此事も巫學談弊と。印度藏志と小委く論へ了。中もも嵯峨



天皇の書せ給へる。金字心經の奥の書く記の詣神舎輩  
奉誦此秘鍵。昔予陪鷲峰說法之筵。親聞此深文。豈不達其儀  
と書るれども。餘亦依妄語あり。

殊小名聞利養の爲小。魔事妄言は更うも言はま。我慢勝他の  
悪念深く。修圓法師を呪殺し。

今昔物語集小。嵯峨天皇の御代小。弘法大師僧都に位めて。  
天皇の護持僧ありき。はら山階寺の修圓僧都といふ人も。  
護持僧ふて。共小候ひけり。此二人は僧都共う。止事あり人  
りて。天皇分れ思召に事無りり。然る小修圓僧都。天皇の  
御前小候ふ間。大ある生粟あり。天皇此を煮しめて。持參れ

と仰せ給へば。人取て行くを見て。僧都云く。人間は火も  
て煮ばとも。法力をもて煮候ひあるむと云ふ。天皇聞給ひて。  
極め貴事あり。速小煮給しとて。塗くる物の蓋小粟を  
入きて。僧都の前小置け。僧都然まは。試小煮候はむとて。加  
持ける小。甚吉く煮られぬ。天皇此を御覽じて。限れく貴  
ひて。即聞召はる。其味は他小異れり。かく爲るを度小  
成ぬ。其後大師參り候。天皇此事を語らせ給へる。大師  
聞て申し給ぬ。此事實小貴し。而る小已候む時小。彼を  
煮しめ給ふべし。隠れて試候むと隠れ居ぬ。ある僧都  
を召て。例の如く粟を煮しめ給ふは。僧都前小置て。加持を



依レ子此度は煮ラれズ。僧都力を出シて返ル。加持ハと云へども。前の如く煮ラれズ事あり。其時小僧都奇異ト思ヒを成スて。此レを何カある事ト思ヒ程ヲ。大師喬シゆり出スと。僧都此レを見て。ちキむ此人の押サける也と知リて。嫉妬ノ心忽チ小發ラりて立チぬ。其後は二人此僧都極キめて中惡ク成テ。互ニ死シ糸クと呪咀シりテ。其時小大師謀ハを成テ。弟子トも城市小遣リて。葬送ノ物ト此具共ヲ買ハしテ。空海僧都ト。早く失ハ給フ予レれト。葬送ニ具ヲ買ハふありと。教ヘて云ハしむ。修圓僧都の弟子是ヲを聞テ。喜ビて走リ行キて。師の僧都ト此由を告グ。僧都此字聞テ。慥ク聞キやと問フ。弟子慥ク承リて告申に

あリと答フ。僧都ト此れ他ニ非ズ。我が呪咀シ給フ祈ノ叶メぬ也と思ヒて。其祈ノ法ヲを結願シ給フ。其時ニ大師人ヲをもて。竊ニ小修圓僧都ト此許ス。其祈ノ法ト結願シ給フやと問ヒむル。今朝結願シぬル由ヲ依リいフ。其時大師切キて小切りて。其祈ニ此法ヲを行ヒりレむ。修圓僧都ト俄ニ失ハりテ。大師其後ニ心安クあリ思ハはスりテ。此事古書トも彼此ヲ見エるル。何キも守敏僧都トあり。修圓トあるは。今昔物語集ノみレ也。按テふニ一ツを名ニ。一ツは号ヲそ有リむ。法師トは然ラるル倫トいと多ク也。此レ二人の僧都ト此レ共ニ小幻術トある事ヲ云フふも更ニあるル。空海僧都ト。あリ小幻術ノ力ト此勝スと依リ



を有ける。惑ふ<sup>トド</sup>陰うらに。

死後ふもれを邪執を留めて。在世中此妄説を<sup>トメ</sup>示せる。摠て魔道の所爲あり。

然るは古事談ふ。六波羅の大政入道。安藝國司。此時。重佛此功小。高野の大塔を造られり。材木を手扱うら持せり。其時香塗を著ぐる僧出來て云く。日本國此大日如來は。伊勢大神宮と。安藝の嚴嶋あり。大神宮を何まに幽玄れに。汝あま〜國司やぬる。早く嚴嶋に奉仕まべしと云ふ。守まきを奇み。貴房をば誰と申はと問はば。奥院の阿闍利と申はと云て。搔消やうふ失りけり。此僧をば國

司の外。餘人此を見よと何に。奥院へ詣りる時。大師御戸を開き袖を差出させ給ふ。此に依て五箇所を寄進せらゆ。と云事も見えと。清盛も此故あや。弘法深く信じて。己を通えて。源義平の靈に雷鳴して崇りる。弘法眞筆此心經を守り懸りし。城恐しさの餘り。頸に挂あぐら。打振く。あまに。平治物語小見えと。死後もかく我執小。在世中の妄説を云へり。大神宮は更あり。嚴嶋神も豈大日れらむや。はと諸書小。空海勅を受けて。朱雀門の額を書し。後小野道風朝臣其額を見て。朱雀門を朱雀門と。略頌小作りる程。やぐて中風して手かぬ。死。手跡も



異やう小成りけと記して。後人の甚く恐る由見ゆま  
と。是もし實あらは。我執あらばら免や。俗人を然も有あむ。  
豈あれ出家れ本意れらむや。出家せいふは三種あてて。一  
小親を辞して世俗の家を出。二は道悟て五蘊家を  
出。三は果を證して三界れ家を出と云ふ。れど此現世  
の事小執を殘して。纔小此境をさす小出さゆら年。

次り圓仁法師を。其師最澄が志成受て。妄説弘免て。首楞嚴  
院を建立し。法華經を書し。依時小。住吉神現れ。彼經を守護  
まると宣へると云ひ。まゝ諸神替るゝ。彼經を守護せむと。誓  
牙依由を詐てて。三十番神といふ事を妄作し立くる。是名聞

我慢の魔業あり。

其を古今著聞集小。慈覺大師如法經書りる時。白髮の老翁  
杖小携がりて。山より上りゆら。何れ苦し。内裡れ守護  
と云ひ。如法經の守護といひ。年を高く成て。苦く候ぞと宣  
ひりて。誰り御渡り候ぞを尋ぬれむ。住吉神ありと。名告  
けると見え。今昔物語集小。慈覺大師は。傳教大師の入室寫  
瓶の弟子也とて。比叡山成受傳へ。佛法興隆れ志し。殊小深  
し。而れを別小首楞嚴院を建立し。中堂を立て。觀音不動毘  
沙門を安置し。摠持院を起て。宋より將來の舍利を藏めて。  
舍利會成行ひ。常行堂を建て。不斷念佛を修り。是阿弥陀佛



を讚<sup>コエ</sup>ふる音あり。引聲と云ふ是あり。ほく山小大なる相木<sup>スギノキ</sup>有<sup>コ</sup>。其木の空小住して。如法子精心して法華經を書<sup>カ</sup>れける。書畢て此經を安置<sup>カキマフ</sup>。如法經此よ<sup>レ</sup>。已<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>依<sup>ル</sup>。其時小此朝此諸<sup>モト</sup>の止事<sup>ヤムゴト</sup>れき神。み<sup>ナ</sup>誓<sup>ナヒ</sup>を起<sup>オク</sup>し番を結<sup>ムス</sup>びて。此經を守り奉<sup>ホウ</sup>らむと。誓へ<sup>コト</sup>と有り。諸神のかく誓ひ給<sup>タマ</sup>ふりと云<sup>コト</sup>。元<sup>モト</sup>此法師の言出<sup>イハシ</sup>べを誰<sup>タレ</sup>り知らむ。釈書子。此時書<sup>ク</sup>る經を。小塔子藏<sup>ツカ</sup>えて。一菴小ねく。如法堂と名<sup>ナ</sup>づく。今の首楞嚴院あり。法華經を如法經と云<sup>コト</sup>。是よ<sup>レ</sup>已<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>まる由云へり。ま<sup>レ</sup>引聲の事も。古事談<sup>コ</sup>。慈覺大師も。音聲不足ありし<sup>ク</sup>ば。尺八を以て。引聲の阿弥陀經を吹<sup>フク</sup>れり<sup>コト</sup>。成就如是功至

莊嚴といふ處を吹<sup>フキ</sup>得<sup>ユ</sup>ざ<sup>リ</sup>。常行堂の辰巳此松扉<sup>マツヒサ</sup>ふて。吹あ<sup>ハ</sup>け<sup>ル</sup>ひり依<sup>ル</sup>。空中小聲阿<sup>ア</sup>。て。ヤ音を加<sup>カ</sup>ふよと云へ<sup>コト</sup>。是よ<sup>レ</sup>已<sup>レ</sup>如是ヤと。ヤ音<sup>オン</sup>加<sup>カ</sup>へ<sup>ル</sup>ゆと有り。功德を聲の善惡小依<sup>ヨル</sup>ま<sup>レ</sup>じ<sup>レ</sup>物をや。

其建<sup>キ</sup>る院の名<sup>ナ</sup>負<sup>カ</sup>ふ。首楞嚴經小も。定中見<sup>ミ</sup>色陰銷<sup>シユ</sup>受陰明<sup>メイ</sup>。白<sup>オシ</sup>自謂<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>足<sup>ニ</sup>忽<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>慢<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>疑<sup>ニ</sup>誤<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>。此則有<sup>テ</sup>大我慢魔入<sup>ル</sup>其心臍<sup>シ</sup>と<sup>レ</sup>伺<sup>ル</sup>。相室<sup>スギムロ</sup>此定中<sup>ニ</sup>。己<sup>レ</sup>自足<sup>ル</sup>已<sup>レ</sup>と謂<sup>ハ</sup>へ<sup>ル</sup>我慢心<sup>ニ</sup>あり。衆生を疑誤<sup>ウタガハ</sup>せる。妄説<sup>マコト</sup>を吐<sup>ハキ</sup>く<sup>コト</sup>ありむ。

諸神の法華經を守護せむと宣<sup>ノ</sup>へり<sup>コト</sup>云<sup>フ</sup>。妄説<sup>マコト</sup>を有<sup>ル</sup>が中<sup>ニ</sup>。小最憎<sup>イトニク</sup>き言<sup>コト</sup>あり。れ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>巫學談<sup>マコト</sup>弊<sup>ハ</sup>小言<sup>コト</sup>ふ<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>法<sup>シ</sup>。



次小智證とは。圓珍法師が事あり。此を祖業を受て。比叡山を  
持し居る。猶喜足を知らず。別し我が門徒を立むと。三井寺城  
再興して。三尾神を誣ひて。佛法を守る神とし。

其は今昔物語。元亨釈書。古今著聞集あやふ。智證大師我が  
門徒を。別小立てむと思ふ心有て。我が門徒の佛法を。傳置  
けき所り有る也。所くも求めて。新羅明神と共り。近江國志  
賀へ行給ふ小。昔大友皇子に立する寺あり。寺辺は荒れ  
一房あり。年老する僧一人居あり。其名を教待といふ。見れ  
む。鮎の鱗骨あと。炊食散して。臭こと限あし。僧の躰を見る  
小。貴く見ゆれむ。定めて様有らむ也。思ひて語らふ。老僧

云く。我此處に住て。百六十年を経り。此寺を弥勒の出世  
はて。持たき寺あれども。持べき人無に於る小。幸し師に來  
て給へむ。永く讓り奉る也。いふ。新羅明神は。寺に北野に止  
まり。無量の眷屬圍繞せられども。他人を此を知らず。其時よ  
興小乗する人。百千に眷屬を引率して來り向ひ。明神を飲  
食を奉り饗して。大師小告て云く。我は此寺の佛法を守ら  
むと誓へる神れり。今聖人此寺を傳へ得て。佛法を弘め給  
ふ。後らまは。今よと深く大師を憑まむと。老僧と共り明神  
の處に至り。互小喜悅す。然る小老僧を興小乗する人と。忽  
小見え。明神を誰人か。御に問ふ。老僧を是弥勒如



來。佛法を護持せむ爲。此寺に住給ふ。輿に乗る人。三尾明神に御託と答へ給ふ。然れども只人は非と見おる。とて老僧の房に至れ。始は鼻かきおる。此度を極えて馥し前小鮒に鱗骨と見おる。蓮花莖根葉を煮食ひたる也。り。其後諸弟子を引具して。此寺に佛法弘免て今ふ盛なり。三井寺を云ふ。天智天武持統三代の天皇此生を給へる時。産湯の水を汲み。依井の有まを御井寺を云し。を大師改めて三井寺といふ。弥勒三會に曉を継しむる故あり。園城寺と云ふは是ありと云へ。新羅明神と云ふ。前小渡唐しある。歸る。新羅國よ伴ひ來れる。蕃

神あれ。佛法の守護を然も有。弥勒并の出現せりと云ふも。實は有名無實に物あれ。釈魔に出現はる。此珍のら糸を。然も有り。唯三尾神の出現して。佛法を守らむと誓へ。と云ふ事は。例の妄語あり。若實に出現せるれば。其まゝ釈魔の出現あるを。誠は弥勒。眞の三尾神と欺かき。おる。此も。菩提心。忘失して。善根を修し。名聞に爲。己が門徒を別立て。むと思へ。我慢心より。起り。此僧に勝他の名聞心あり。三井寺に立て。其一派を遺せる。故に。慈覺に徒。智證の徒と。天台二派に別れて。其徒の互。我慢勝他。乃邪見を發して。和合せ。世を驥



乱せしを天皇をも蔑如し奉ずる事。次く記を見えて知る  
彦。後より此僧の諡号此事を僉議何ぞしと。主上の御夢  
小。別名求らば。大通智勝れと。ば。智證と付べ  
也。也。誨。白せるよし。古事談三卷あど小見くる。も。既小  
天狗と成しかむ。了。

是より後の法師ども。上る依四大師の妄説を根基と。して。弥  
次く小。神を佛法より引率る。妄説を吐散せる事は。今盡く記  
し。子。遑。何ら。取。總。て。言。は。ぶ。本地垂迹此説を。行基并其種  
を。殖。初。ある。故。四大師の其枝繁茂せし。弘通せる。なり。實小  
皇神の道。此大妖魔小非。也。是を以て神社考小。沙門之有。慢

心者。多入天狗之中。傳教弘法慈覺智證等是也。とは言れり。む。  
然れむ。神道小志有らむ人。此を能く辨へ。之を有。彦。うら  
也。神社考小。夫本朝者神國也。中世佛氏移。彼西天之法。變。吾  
東域之俗。神道漸廢。而以其異端離我。而難立。故設左道之説。  
曰。其本地佛。而垂迹神也。時之王公大人。信伏不悟。遂至令神  
社佛寺混雜。而不疑。巫祝沙門同住。而共居。嗚呼神在。而如亡  
神。如為神。其奈何哉。讀書知理之人。可少覺也。非為庸人。而。言  
之。と。言。れ。し。を。孰。思。ふ。及。し。四大師已小。右の如く。魔事魔業  
を。脱。せ。ば。其門葉末派の法師。と。ち。魔道小。墮。さ。る。は。一  
人も有。は。む。く。覺。也。



形不神社考小。尊意與群鳥同翔於橫川之杉。

澄圓僧が志評論子。釈書の尊意傳を引て。釈尊意姓丹生氏。十七落髮修練之後任延曆寺座主。天慶三年二月二十四日逝年七十五。瞑目之後。鳥百餘集房悲鳴見人不避。移時飛去。蓋生平分食施鳥以木叩板群鳥飛來矣。若因是為群鳥哉。分食施鳥最沙門檀施也。何得群鳥之業哉と云へれど。羅山先生の意は尊意を鳥の業を得りての事小は非也。群鳥と共小。横川に杉子翔と云ふは正しく古書子。其靈の群鳥と共了天狗と化りて翔と云ふ事の有らむを見て記されらむを。釈書小は其事を隠して。只小鳥に集れる事也。

みま記して。其やがて徳行を感慕して集へる事小執成と依物あるべし。予は未先生の見られし書を見らむとも。尊意を後小。妙義權現と崇えたる。其縁起を見れむ。古より釈子の魔道子墮たる倫い多り依を。我いうて其魔道子入とて。其倫を降伏して。正道小赴けむと誓ひて其黨小入る由見えとて。是極めて古に據有べりれむ。羅山先生は其哉見て言れしれらむ。

慈惠著甲冑攻三井寺燒千手院。

元亨釈書を始め。諸書を考ふる小。圓融院天皇の御世。天元四年十二月。餘慶法師哉。法性寺の座主小補せら依。此を智



證れ徒あり爰に慈覺の徒奏云く。眞信公始えて。法性寺を  
建て。辨日法師を座主と任せし以來。九代相繼て。慈覺の門  
才小當る。然る小今第十代に。智證の門人をえて加すは。  
慈覺の徒望を失ふ信しといふ。敕答に檀家小告よと宣へ  
は。慈覺れ徒百六十人。檀家関白頼忠公乃家ヲ向て喧ぎ訴  
す。ちむくく。爭論何ぞ。帝聞食して。法性寺に座主始よと慈  
覺の門小附り也。智行兼備の者を撰ひて任する。適く  
慈覺れ門人多加りし故小。相次て此を領せ也。今餘慶ま  
と智行の譽何ぞて任也。何ぞ必しも。慈覺の門を守らむ  
や。況也喧爭徳を敗り。僧侶の事非也と怒坐して。百六十

人の封職を息む。茲よと兩門和せに拒争ひ日小滋し。智證  
れ徒叡山出でて別院小居し。餘慶も門人を率ゐて。觀音院  
小住也。その徒弟勝算。觀修。穆算など百餘人。元山上千手  
院に在り。此時慈惠僧正良源也。天台座主めて。元より是慈  
覺れ徒あるを。密に謀て。衆徒をえて千手院を焼しめむ  
とに。此事朝小聞えし。うは。敕を下して云く。良源千手院を  
焼て。餘慶穆算等を殺さむと欲はる陰謀匿し難し。早く其  
機を止免よと。良源表出上て陳也。是よと後。一條院。天皇  
の永祚元年九月。餘慶僧正を。延曆寺の座主補せらる。慈  
覺れ徒奏して云く。智證の門徒座主小補せられ。講堂を



開<sup>ヒラク</sup>べあらばと。帝<sup>ミカド</sup>を更<sup>カ</sup>ゑり。時の関白兼家公も。はと過<sup>ヒ</sup>訟<sup>ソウ</sup>せ  
思<sup>ホシ</sup>食<sup>シ</sup>り。同<sup>ドウ</sup>帝<sup>テイ</sup>の正曆四年。觀音院成<sup>ナリ</sup>筭<sup>ソ</sup>の徒。叡山衆と御<sup>ヒ</sup>あ  
り。慈覺の徒。千手院を焼<sup>ヤ</sup>き。房舎を壞<sup>ヤ</sup>ること四十餘宇あり。  
兩門相爭<sup>アラ</sup>ふ。慈覺の徒。智證の徒。一千人を擯<sup>ヒ</sup>りて。山を出せ  
り。とあり。此時良源死<sup>シ</sup>して。既<sup>ス</sup>に九年の後あり。彼天元四  
年の。存生ありし時。千手院を焼<sup>ヤ</sup>むと陰謀<sup>インボウ</sup>し。起<sup>キ</sup>る。故<sup>コ</sup>に救<sup>ク</sup>ふ  
依<sup>ヨ</sup>りて止<sup>ト</sup>まれ。と。其宿執勝<sup>トク</sup>佐<sup>サ</sup>は。惡念<sup>アクネン</sup>れ。止<sup>ト</sup>む。て。此時  
其靈<sup>タミ</sup>れ。現<sup>ア</sup>る。と。徒<sup>ト</sup>に千手院を焼<sup>ヤ</sup>し。め<sup>メ</sup>る。事<sup>コト</sup>に。古書<sup>コショ</sup>に有<sup>ア</sup>り  
しを見て。言<sup>イ</sup>れし。成<sup>ナ</sup>べし。今昔物語集<sup>イマキモノガタリ</sup>に。良源僧正<sup>リョウゲンソウテイ</sup>成<sup>ナ</sup>靈<sup>リョウ</sup>來<sup>ライ</sup>觀<sup>カン</sup>  
音院<sup>オンイン</sup>。伏<sup>フ</sup>餘<sup>ヨ</sup>慶<sup>ケイ</sup>僧<sup>ソウ</sup>正<sup>テイ</sup>語<sup>ゴ</sup>といふ條<sup>ジョウ</sup>あり。今本<sup>イマホン</sup>に本文<sup>ホンテン</sup>を關<sup>カ</sup>し。と。と。

前後小天狗の事を記せる間。此題号の條を思ふ。此を  
決<sup>キ</sup>めて天元四年。此一件の宿執<sup>ソクシ</sup>に依<sup>ヨ</sup>りて來<sup>キ</sup>起<sup>キ</sup>る事<sup>コト</sup>と覺<sup>カ</sup>也。  
羅山先生<sup>ラサンシヤウ</sup>に。此條の關<sup>カ</sup>が。原本<sup>ホンペン</sup>を見て言<sup>イ</sup>れし。あらむ。猶<sup>ナ</sup>下<sup>カ</sup>に  
記<sup>キ</sup>に。祇園<sup>ギエン</sup>を。天台<sup>テウタイ</sup>に末<sup>マツ</sup>寺<sup>ジ</sup>とせる。一條<sup>イツジョウ</sup>を見て。も。良源<sup>リョウゲン</sup>の宿執<sup>ソクシ</sup>  
深<sup>フカ</sup>き事<sup>コト</sup>は。炳<sup>ヒ</sup>焉<sup>ン</sup>。し。ら。て。此後<sup>ココノチ</sup>を。は。ま。く。執<sup>シ</sup>を引<sup>ヒ</sup>て。比叡山<sup>ヒエツヤマ</sup>と  
三井寺<sup>サンメイジ</sup>と和<sup>ワ</sup>せ。也。動<sup>ユ</sup>も。は。ま。は。鬪<sup>ウ</sup>争<sup>ソウ</sup>。起<sup>キ</sup>發<sup>ハツ</sup>して。世<sup>セ</sup>に。躁<sup>ソウ</sup>か。し。宸<sup>チン</sup>  
襟<sup>キン</sup>を。も。れ。や。免<sup>メ</sup>奉<sup>ホウ</sup>り。三井寺<sup>サンメイジ</sup>を。焼<sup>ヤ</sup>く。る。事<sup>コト</sup>も。數<sup>カズ</sup>く。有<sup>ア</sup>り。中<sup>ナカ</sup>に。古<sup>コ</sup>  
事<sup>コト</sup>談<sup>タン</sup>に。永保元年<sup>エイホウノトシ</sup>六月九日。叡山<sup>エツヤマ</sup>の僧徒<sup>ソウト</sup>に。為<sup>ナ</sup>す。三井寺<sup>サンメイジ</sup>を。焼<sup>ヤ</sup>る。  
其<sup>コノ</sup>日<sup>ヒ</sup>記<sup>キ</sup>云<sup>イフ</sup>。御影<sup>ミカゲ</sup>十五所。堂院<sup>ドウイン</sup>七十九所。塔<sup>トウ</sup>三基。鐘樓<sup>ショウロウ</sup>六所。經藏<sup>キヤウザウ</sup>  
十五所。神社<sup>シントウ</sup>四所。僧坊<sup>ソウボウ</sup>六百廿一所。舎屋<sup>シャウイ</sup>一千四百九十三宇。



廣考<sup>ニ</sup>天竺震且本朝<sup>ヲ</sup>佛法興廢未有<sup>ラ</sup>如此<sup>キ</sup>破壞。智證大師入滅  
以後<sup>ニ</sup>歷<sup>テ</sup>百九十一年<sup>ニ</sup>有此<sup>ノ</sup>災云<sup>ク</sup>と有り。互<sup>ニ</sup>小<sup>ノ</sup>天狗とありて  
此<sup>ノ</sup>争<sup>ハ</sup>ひ也<sup>ナリ</sup>。あ<sup>リ</sup>と同書<sup>ス</sup>。西京の良真僧正<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。三井寺  
を焼<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>。僧房<sup>ヲ</sup>許<sup>シ</sup>を焼<sup>ケ</sup>て。衆徒等<sup>ハ</sup>帰山<sup>シ</sup>し<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>。是<sup>レ</sup>ば  
座主<sup>ニ</sup>これ<sup>ヲ</sup>を聞<sup>テ</sup>。堂舎<sup>ノ</sup>經藏<sup>ヲ</sup>燒<sup>ク</sup>らば<sup>ハ</sup>ち<sup>ニ</sup>甲斐<sup>ノ</sup>阿<sup>ノ</sup>ら<sup>メ</sup>。僧  
房<sup>ヲ</sup>許<sup>シ</sup>を詮<sup>テ</sup>ふ<sup>キ</sup>事<sup>也</sup>と云<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>。翌日<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>と發向<sup>シ</sup>して。金堂  
より<sup>テ</sup>始め<sup>テ</sup>。堂宇<sup>ノ</sup>經藏<sup>ヲ</sup>み<sup>テ</sup>焼<sup>ケ</sup>拂<sup>ケ</sup>るとも見<sup>レ</sup>也<sup>ナリ</sup>。代<sup>ノ</sup>の座主<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>。  
我慢勝<sup>テ</sup>他<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>執<sup>テ</sup>深<sup>キ</sup>也<sup>ナリ</sup>。是<sup>レ</sup>も<sup>テ</sup>知<sup>レ</sup>へ<sup>シ</sup>。ま<sup>ハ</sup>と此<sup>レ</sup>可笑<sup>キ</sup>  
事<sup>也</sup>。此<sup>レ</sup>も同書<sup>ス</sup>。保安二年閏五月三日。園城寺<sup>ヲ</sup>燒<sup>ク</sup>失<sup>フ</sup>の<sup>事</sup>  
也<sup>ナリ</sup>。或<sup>レ</sup>寺<sup>ノ</sup>の僧<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>夢想<sup>ス</sup>。褐冠<sup>ヲ</sup>を著<sup>ス</sup>る<sup>人</sup>也<sup>ナリ</sup>。誰<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>御坐<sup>レ</sup>  
り。

と問<sup>ハ</sup>へ<sup>テ</sup>答<sup>ヘ</sup>云<sup>ク</sup>。我<sup>ハ</sup>新羅明神<sup>ノ</sup>眷屬<sup>也</sup>あり。此<sup>レ</sup>寺<sup>ヲ</sup>を守護<sup>セ</sup>  
む<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>。小<sup>ノ</sup>經廻<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>とい<sup>フ</sup>。夢中<sup>ニ</sup>小<sup>ノ</sup>嘲<sup>リ</sup>て云<sup>ク</sup>。佛像<sup>ノ</sup>經論<sup>ノ</sup>堂舎<sup>ノ</sup>僧  
房<sup>悉<sup>ク</sup>灰燼<sup>也</sup>あり畢<sup>ル</sup>也</sup>。何物<sup>ヲ</sup>を守護<sup>セ</sup>らる<sup>ル</sup>。修<sup>マ</sup>き<sup>ヤ</sup>。無<sup>益</sup>の  
守護<sup>リ</sup>と各<sup>々</sup>行<sup>分</sup>後<sup>ニ</sup>。ま<sup>ハ</sup>と直衣<sup>ヲ</sup>を著<sup>ス</sup>。依<sup>テ</sup>耆老<sup>ト</sup>人<sup>出</sup>  
來<sup>ル</sup>。容<sup>躰</sup>を見<sup>ル</sup>。小<sup>ノ</sup>直人<sup>ト</sup>非<sup>ズ</sup>。其<sup>ノ</sup>眉<sup>長<sup>ク</sup>垂<sup>テ</sup>口<sup>小</sup>及<sup>ビ</sup>。</sup>  
鬢<sup>髮</sup>皓<sup>白</sup>あり。件<sup>ノ</sup>人<sup>云<sup>ク</sup>。汝<sup>ガ</sup>言<sup>ハ</sup>太<sup>以<sup>テ</sup>子<sup>細</sup>知<sup>ラ</sup>ズ。</sup>本<sup>ヨ</sup>  
也<sup>ナリ</sup>。此<sup>レ</sup>寺<sup>ヲ</sup>守護<sup>ス</sup>の素意<sup>ヲ</sup>。さ<sup>ラ</sup>に堂舎<sup>ノ</sup>僧房<sup>ヲ</sup>を護<sup>ラ</sup>ズ。唯<sup>ニ</sup>出<sup>離</sup>生  
死<sup>ノ</sup>志<sup>ヲ</sup>を守護<sup>ス</sup>。如此<sup>キ</sup>患難<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>也<sup>ナリ</sup>。僧徒<sup>多<sup>ク</sup>道<sup>心</sup>を發<sup>シ</sup></sup>  
修<sup>學</sup>小<sup>ノ</sup>倦<sup>レ</sup>。我<sup>ハ</sup>此<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>を守護<sup>ス</sup>也<sup>ナリ</sup>と云<sup>ハ</sup>へ<sup>テ</sup>。此<sup>レ</sup>事<sup>ハ</sup>園城寺<sup>ノ</sup>の別當  
大僧<sup>都</sup>覺基<sup>ノ</sup>の語<sup>ヲ</sup>申<sup>ス</sup>所<sup>あり</sup>と有り。此<sup>レ</sup>を覺基<sup>ガ</sup>餘<sup>リ</sup>小<sup>ノ</sup>度<sup>也</sup></sup>



度其寺の焼れもる。新羅明神の守護神とて在るがら。云ふ甲斐れき事哉思ひて。造言せざる。もしも此夢誠れらば。彼僧此難詰ふおまりて。さゆ負惜みの妄言せゆりの二おを出せ。いづれをかし。死事あらや。

覺鏝得造作魔心營傳法院。高野衆徒忿而鼓譟攻鏝居不見鏝而見不動衆徒曰是必鏝也。飛石中不動時血流衆徒曰非不動是覺鏝也。其後多武峯方等法師狂言曰吾是覺鏝也。怒目睨人取火箸燒爐中。手自弄之曰我始作即身成佛之印。是兩部秘奥之印明也。

元亨釈書を始免諸書を考ふる。覺鏝を肥前國人にて平

氏なり。此記されし事は多武峯。方等法師といふ者也。數月狂疾差。安部山の慶圓法師と云を迎へて加持せしむ。慶圓その房よ入れむ。方等目哉怒して慶圓を睨み。火箸を取て。爐中にて焼く。手小弄ぶ。慶圓軟語慰誘して菩薩戒を授く。方等微笑して云く。我火箸を焼く。師の心を試みむと欲してなり。然ゆ。今師の誦戒を聞て。我心已小降。此。慶圓云く。公を誰あるぞ。方等云く。我を覺鏝あり。此。方等我を誣て。即身成佛の印言は。覺鏝始免て作れりと。殊。知らぬ。彼印言は三圓相承。此兩部秘奥の印明あり。我只去の事哉言むと欲して。屢く方等よ託る。乃。慶圓云く



幸甚あり。今名徳小逢アひて未聞を聞キクことを得エり。請談  
良久ヤ、ヒサしく。方等ヤヒが病ヤヒをレちチ瘡イユ多クし。羅山先生イの  
事コトを言コトれしレ也。

又和州、堯信爲天狗言ラ而告テ慶圓曰。吾是中院僧都也。浮屠巫祝  
豈能降サ我哉。我心慢罵之。揮セ斥セ之。我徒有神力者三百餘類。伺入  
死シ作ス燒害。自古高僧碩師。臨終多遭魔撓。皆我之所爲也。と有リ。  
此事も元亨釈書小。大和國に堯信と云者あり。狂疾を受く。  
加持する者あり。慢罵揮斥。其父安部山の慶圓を屈し  
て救スひを乞ふ。慶圓彼カニ小到イタれ。堯信恭敬ウヤク志シく礼レ字ヲ作シて  
曰く。此ごろ陋イし比丘。賤イしき巫覡ら。聲を厲ハくテ呼號

する故レに我慢罵をレれ。今高德小値アふまニ幸サハあり。願ネガはく  
は左右を退ヒけよ。我が夙志を通セせむ。慶圓をレち看病の  
者サ去サる。堯信云く。我先世サキノヨに灌頂を欲シして。遂トびテ亡シ。  
餘執ツキ竭キ交カ生シ鬼趣ウチ小受ウケと。而ニれトも法力リキに感カずる所ナ  
を神威ネガあり。願ネガえくは悲救を垂タして。密灌を授與サツせよ。慶圓  
云く公ナニヒトを何人ナニヒトぞ。堯信憮然ハツとシて恥ハツる色シあり。慶圓いニれ  
己スデ小授與を乞コふ。豈アニナ名ナを忌イむや。堯信良久ヤ、ヒサしレて云く。  
我は中院僧都某あり。慶圓をレち灌頂を授サツく。堯信歡喜  
合掌カウして云ク。宿望スデ己スデ小足タまり。久コく此コに居ユル居ユルらレ。何  
を以テ此コ恩オンを酬ウケいむ。慶圓云く。我世心ワレヨゴロ己スデ小灰ツキぬる餘サを何



城う言をむ。而れども此コ一ツ何ア。古コより碩師宿徳。臨終小  
魔撓ハ遭フ者多クし。神威あらはコ意コせよ。堯信いはく。我徒神  
力の者三百餘人何メ。人此死を伺ウひて燒害を作ス。これ誠  
免ハは敢アて為サらむと。言コト已マるマ疾キにハち愈ユりト有リ。  
中院僧都某モあハ依カを。名を憚ハりて記カざるル也。十訓抄十卷  
小。遍昭と云ふ也。左馬頭顯定の子也。中院僧正をいふと  
有リ。此ハ人ヲや猶ホ致カふシ。



